上津島南遺跡発掘調査概報

—府営住宅建設工事に伴う第一次調査—

1984.3

府営上津島住宅遺跡調査団

序　　文

豊中市は近年住宅地としての開発が進み、近代都市としてその姿を変えてまいりましたが、それにあわせて新しい遺跡が発見されるなど、歴史的、文化的に貴重な資料がつぎつぎに得られております。

このたび、豊中インターチェンジの北西に位置する上津島２丁目、府営上津島住宅の建替事業に伴い発掘調査を行いました。この地域周辺には猪名川流域における、著名な多くの弥生時代の遺跡が点在しており、学術的にも重要な意味をもつところがあります。豊中市教育委員会は、これらの遺跡を記録保存するため大阪府の支援をうけて発掘調査を実施いたしました。

この遺跡は、新しく上津島南遺跡と名づけられ、調査の結果遺物や遺構のひとつひとつから、この地に去来した人々の生活にかけた様ざまな知恵を学びとることができます。

今回の調査にあたり、府営上津島住宅遺跡調査団によって試掘調査から本調査、出土遺物の整理、保存、本書の執筆刊行まで長期にわたり積極的にご尽力いただきました。

調査団長の亥野彊先生をはじめ、直接調査に当たっていただいた調査員、ならびに大阪府関係各位に多くの分野でご助力をいただきましたことに、心より感謝の意を表し序文といたします。

昭和59年３月

豊中市教育委員会

教育長　湯元英世

例　　言

1．本報告書は大阪府の府営上津島住宅建設に伴う埋蔵文化財確認調査報告書の概要である。調査の本報告書は第二次、第三次調査の結果をまって合わせてまとめることにしている。

2．本地区の確認調査は大阪府建築部住宅建設課、豊中市教育委員会より、府営上津島住宅遺跡調査団が委託を受けて実施したものである。

府営上津島住宅遺跡調査団

団　　長	亥野　　彊	奈良県立橿原考古学研究所研究嘱託 八代学院大学講師
調査委員	山村　　勲	豊中市教育委員会社会教育部長
調査員	柳本照男	豊中市教育委員会文化財担当職員
〃	厚美正子	豊中市教育委員会文化財担当嘱託
〃 (現地主任)	橋本正幸	豊中市教育委員会文化財担当嘱託

3．本概要報告書作成については亥野、橋本、岡崎茂和、山本恵、細川佳子、萩野典子が分担執筆している。

4．調査の進行、出土遺物の考察等については豊中市文化財保護委員の藤沢一夫・富田好久の両氏と奈良県立橿原考古学研究所の各位に助言をいただいた。

5．遺物の実測図は山本、細川、萩野、久米和美、川端千寿、橋本加寿美、渡部貴夫が担当し、遺物写真と拓影は亥野が行なった。

6．調査実施にあたっての事務処理は豊中市教育委員会、社会教育課、前課長、豆腐谷英世、同係長、桑原善孝、同係長松尾誉、現課長榎原正宣、同係長於勢真十郎の各氏にお世話いただいた。

7．調査後の遺物整理に場所を提供していただいた豊島北小学校ならびに調査に協力を得た多数の学生諸君に感謝したい。

調査補助員

清水敏彦	橋本郁也	阪本正幸	小嶋久夫
前田佳久	牧野　暁	竹谷俊彦	前沢郁浩
中村英彦	大森　修	吉村和昭	長沢和久
園田克也	須藤聖子	山田恵美	池上ちか子
上田桂子	片井祐子	今田しのぶ	佐藤あゆみ
石井玲子	荒木昭子	井本知里	以上

本　文　目　次

1．　調査の経過と方法 …… 1
2．　遺跡の位置と歴史的環境 …… 2
3．　調査の概要 …… 7
4．　出土遺物の観察表 …… 13
5．　ま　と　め …… 43

挿　図　目　次

第１図　調査地区設定図 …… 1
第２図　周辺遺跡分布図 …… 4
第３図　遺構全体配置図 …… 5
第４図　基本層序断面実測図 …… 7
第５図　木棺墓　人骨残存状況(東から) …… 8
第６図　土壙墓　人骨残存出土状況(東から) …… 9
第７図　土壙墓　瓦器埦出土状況(東から) …… 9
第８図　蔵骨器断面実測図 …… 9
第９図　井戸１　土器出土状況(東から) …… 10
第10図　井戸１　断面状況(南から) …… 10
第11図　土器集積群１平面図 …… 11～12
第12図　円形土壙３立面図 …… 11～12
第13図　円形土壙３平面図 …… 11～12
第14図　円形土壙３層序断面図 …… 11～12
第15図　土壙５平面図 …… 11～12
第16図　土壙５層序断面図 …… 11～12

図　版　目　次

図版１　土器集積群１出土遺物実測図
図版２　土器集積群１出土遺物実測図
図版３　土器集積群１出土遺物実測図
図版４　土器集積群１出土遺物実測図
図版５　円形土壙３出土遺物実測図
図版６　円形土壙３出土遺物実測図
図版７　土壙５出土遺物実測図
図版８　土壙５出土遺物実測図
図版９　井戸１出土遺物実測図
図版10　土壙墓出土遺物実測図（１～６）
　　蔵骨器、蓋、実測図（７・８）
図版11　包含層出土遺物実測図
図版12　各種土器文様拓影（弥生・土師・須恵）
図版13　須恵器文様拓影
図版14　平瓦・軒丸瓦拓影（縄目文・重弧文・重圏文）
図版15　発掘作業と遺跡
図版16　土器集積群
図版17　出土土器
図版18　出土土器
図版19　出土土器と円形土壙
図版20　出土土器
図版21　井戸１出土遺物
図版22　把手・土釜・蔵骨器
図版23　出土土器
図版24　土壙と出土土器
図版25　柱根と土壙内遺物

1　調査の経過と方法

調査の経過

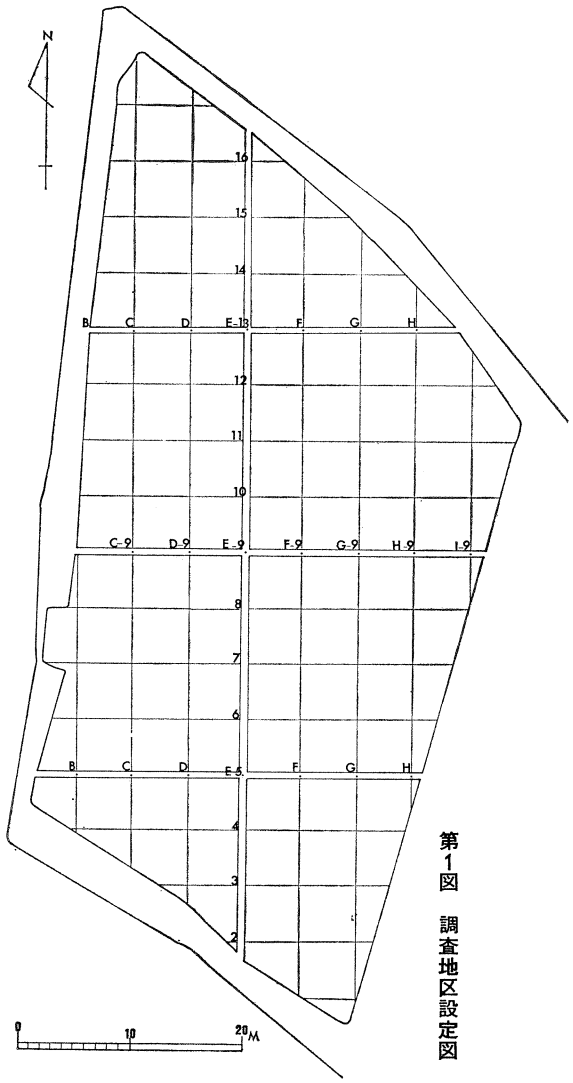
今回の調査地点は、上津島１丁目８番の大阪府・府営住宅地で、その住宅の建替え工事に伴う第一次調査である。

昭和50年、豊中市で遺跡の分布調査を行なった際、この地域で遺物の散布をみたのであった。そこで今度の工事にあたり、当地点の試掘調査に入ったものである。

その結果、大まかにいって弥生時代末（A.D３世紀）から鎌倉時代の初期（12世紀）にかけての遺物包含層をもつ複合遺跡であることを確認することができたので、この遺跡の範囲とその性格を知るための本格的な発掘調査を実施することにしたのである。

調査の方法

調査地点の総面積は、2,156 m²で、このうち現在地表面となる盛土の約50cm、第１層耕土底面までの約20cm、計70cmは機械力を導入して排除することにした。そのため人手による作業は第１生活層にあたる第３層より始めることとした。



第１図　調査地区設定図

調査の方法は、まず調査範囲全域を５*m*方眼に割付け、磁北角を基点に南から北へ１、２、３と順番にし、西から東へA、B、C、とした。これらを組み合せて北東の杭を基準にA—１、E—５、等々に表示した。また南北に１本、東西に３本の土層観察用のセクション堤を設定して各々のグリッドごとに調査を進めていった。

遺構や遺物の出土状況は適宜に写真撮影と実測を行なって観察記録をとることにした。

遺構の平面図は1/50の平板測量、及び1/20の割付け実測を基本としたが、適宜1/10なり1/5などを併用することにしてきた。また土層断面図は1/20、遺構断面図は1/10で作成することにした。

各遺構の検出、遺物の実測、取り上げには深重に作業してきた。

（岡崎）

2　遺跡の位置と歴史的環境

位　　置

遺跡の所在地は豊中市上津島１丁目８番地にあって、その発掘調査面積は2,156㎡である。

遺跡は豊能郡の奥地に源を発し、蛇行しながら南へと流れる猪名川の下流域左岸約300 *m*、尼崎市園田の東側にあたり、標高僅か2.5 *m*を保つ微高地に位置している。ごく近くには昭和37年に設置された名神豊中インターチェンジがあり、陸路運輸の一拠点となっている。また西側４*m*のところに曽根あたりから庄内町に通ずる用水路が南北に通っている。用水路の掘削当初にあっては岸辺の断面、表土下２*m*程で弥生土器の破片数点を採取することができたといわれる。

上津島村落の周辺には猪名川の他、千里川・天竺川など数条の河川が南へ流れており、神崎川・淀川も東から西に流れ大阪湾へと注いでいる。

上津島はこれら河川が合流する付近の低地に所在していることになる。こうした平野部の西側には六甲山地が聳え、北には長尾山地と箕面山地が東西から迫ってきて川西市と池田市の平地をせばめている。

箕面山地の南には須恵器の生産地として周知の千里丘陵が南へはりだし、西の洪積台地（伊丹台地）と相対したかたちとなっている。こうした山地や丘陵の間を通りぬける猪名川流域には自然その流れを利用した集落も発生したことは当然で、漁貝類の採集、農耕期の灌漑、交易などに用いたことであろう。今この猪名川流域を中心に隣接地市内に遺存する主な遺跡を二、三挙げて、本遺跡のおかれている地理、歴史的意義を考えておきたい。

歴史的環境

猪名川の上流域において著名な古代遺跡といえば、川西市内で弥生時代から奈良時代まで続いた栄根遺跡がある。ここでは昭和57年５月からの調査期間中に古墳時代の木舟や、奈良時代に使っていた大工用の墨壷が出土して一躍話題になった遺跡である。その南西約500 *m*の処にある洪積世台地上には石器原材の集積地としても、また方形周溝遺構、それに三、四回もの建て直しの跡を歴然と残した周溝のある住居跡の検出で知られる弥生時代中期を中心とした加茂遺跡がある。

台地の続く南、伊丹市では縄文中期の土器で鉢の一部ではあるが、口縁部に装飾的に加えられた把手をもつ中部、関東系の勝坂式土器を出した大阪空港Ａ遺跡、これも縄文時代であるが近畿地方後期の基準型となる元住吉山式土器の出土した大阪空港Ｂ遺跡がある。それに昭和12年、空港建設工事中に発見され、中村銅鐸の名で呼ばれる神津村中村は、先述のＡ、Ｂ遺跡の中程に位置する。猪名川と藻川にはさまれた沖積世上にある尼崎市田能遺跡では弥生時代の前期から後期まで続いた複合遺跡で、四方100 *m*をこえる遺跡の全面にみられるおびただしい柱穴、弥生時代の墓制の実体を明らかにした木棺墓、銅剣鋳型、白銅製腕輪などの検出は研究者をして驚嘆させたものである。

豊中市内で著名な遺跡となればやはり猪名川沿にある勝部遺跡であろう。弥生時代中期以降のこの遺跡からは数本の石鏃や石槍を体内にもつ人骨の検出があって、それが中国文献に載せられた「倭国争乱」を実証した資料ともみられている。

また千里川が猪名川と合流する地点の左岸にあって銅鐸の鰭部についている飾耳の一部の見つかった利倉遺跡などは弥生時代から鎌倉時代までの複合遺跡として注目すべきものである。

古墳時代になると、その推移発展に従って前期、中期、後期に分けられている。

先ず前期のものとして南刀根山の丘陵を利用して造営された御神山古墳がある。そこの出土品としては、仿製ではあるが三角縁獣帯三神三獣鏡、碧玉岩製の扁円形腕輪などが出土している。同じく刀根山丘陵地が西へ延びる待兼山の北縁には唐草文帯四神四獣鏡、車輪石、鍬形石、石釧などの出土した待兼山古墳がある。

中期古墳になると丘陵から台地へと、また平野に降って造営されることになる。桜塚古墳群はその代表的なもので、その古墳群中には、昭和58年春の発掘調査で直径18cmの方格規矩獣文鏡や全国で初めての出土と云う「石製把付短剣」で有名となった大塚古墳も含まれている。

後期になると市の北部に遺存する野畑春日町古墳群、野畑たこ塚古墳群、新免宮山古墳群とその数も増してくる。これらの古墳群中に埋納されている棺には須恵質のものの多いのが目立つ。

棺は防潮塚、金塚、岸本塚等の古墳に安置されていたがこのうち、岸本塚の場合は大小計四個もの須恵質棺を納めていた。これら棺の製作は、古墳内副葬品として埋納された須恵器を作っていた本市北辺の桜井谷窯跡群中のどれかの窯で焼かれたのに間違いなかろう。窯自体の操業についてはそれぞれ時期差をもつが、六世紀代にはすでに始められているから陶棺は当然ここの窯で焼かれたものとすべきではなかろうか。

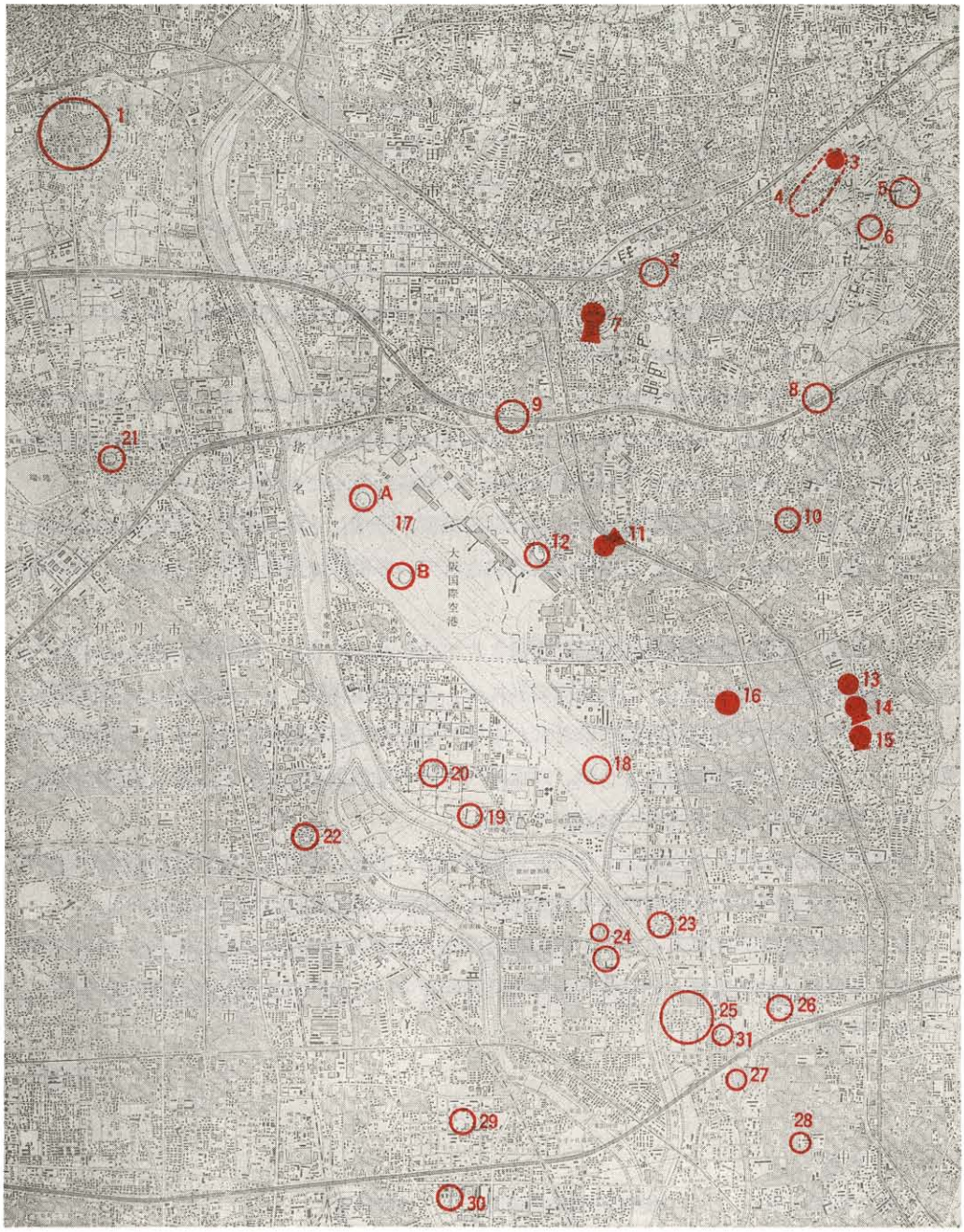
上津島南遺跡で出土した土器のうちでも須恵器が多く出土している。それら須恵器の考察にあたっても桜井谷を中心に分布する市内窯跡群との関係は充分考慮しなければならない。

こうした歴史環境の中にあって、上津島南遺跡は、弥生時代後期から鎌倉時代まで続く複合遺跡であるだけに他の遺跡との有機的関係を明確にしていく上からも重要な位置にあるものといえるであろう。

（亥野）

参考文献

豊中市史第１巻	豊中市史編纂委員会	昭和36年
勝部遺跡	豊中市教育委員会	昭和47年
川西市史第１巻	川西市史編集専門委員会	昭和49年
田能遺跡発掘調査報告書	尼崎市教育委員会	昭和58年
桜井谷窯跡群２―17窯跡	少路窯跡遺跡調査団	昭和57年



第２図　周辺遺跡分布図

1. 加茂遺跡
2. 瀬川遺跡
3. 永楽荘窯跡 2-23
4. 太鼓塚古墳
5. 桜井谷窯跡 2-24,19
6. 野畑遺跡
7. 待兼山古墳
8. 下村町池窯跡
9. 宮ノ前遺跡
10. 金寺山廃寺跡
11. 御神山古墳
12. 螢池西遺跡
13. 大塚古墳
14. 御獅子塚古墳
15. 南天平塚古墳
16. 大石塚・小石塚古墳
17. 大阪空港Ａ・Ｂ遺跡
18. 勝部遺跡
19. 田能遺跡
20. 口酒井遺跡
21. 伊丹廃寺跡
22. 猪名寺廃寺跡
23. 利倉遺跡
24. 利倉西遺跡
25. 上津島遺跡
26. 穂積ポンプ場遺跡
27. 島田遺跡
28. 庄内遺跡
29. 若王寺遺跡
30. 下坂部遺跡
31. 上津島南遺跡

第3図　遺構全体配置図

3 調 査 の 概 要

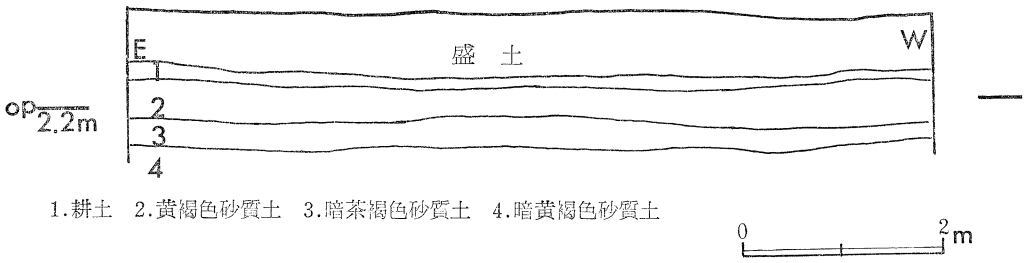
上津島南遺跡（標高2.5 *m*）は猪名川左岸に位置している。従来、猪名川流域に分布する複合遺跡は微高地上に集落跡の密度が高く、本遺跡も地形的条件に適応した微高地面に形成している。

遺跡の地層は褐色砂質土層を基調とする微高地上に掘り込まれたものである。第3層の生活遺構は奈良時代前期から平安時代後期、第4層は弥生時代後期、古墳時代にかけての複合層で構成している。上・下層の生活遺構はプライマリーの遺構と新旧関係のある遺構とで大別される。本概要においては遺跡構造、遺物組成等について継続的な整理作業工程にある現段階では把握するに至っていない。上津島南遺跡の内包する古代・中世変遷過程期にかけての建物造営期に伴う属性的な問題については詳説していない。従って今回、若干の遺構を抽出して紹介することにとどめる。

層　序

上津島南遺跡の基本的な堆積層序は第3図に示すように第4層に区分される。第3・4層は建物造営期による層薄な連続層序が移行する。

第1層（耕土、層厚20cm）。第2層（黄褐色砂質土、層厚30cm）。第3層（暗茶褐色砂質土、層厚30cm）。第4層（暗黄褐色砂質土、地山面）



第4図　基本層序断面実測図

遺　構

土器集積群1（第11図）

土器集積群は南北方向に走行する微高地縁辺部において、土器集積群は4群に分離する構成分布面を検出した。その一群について記述してみる。

一群は、F—2地区の第3層上面で検出できた。プライマリーな状態で位置する廃棄遺物である。遺物範囲内では、160枚前後の土師器大・小皿が集中的に積み重ねた状態で出土した。器種構成を示す日常雑器類が多量に出土しており、器種としては、黒色土器B類・瓦器椀（楠葉・和泉型）土師器皿・土釜、白磁類である。一群の遺物年代は11世紀後半から12世紀前半期に比定されよう。

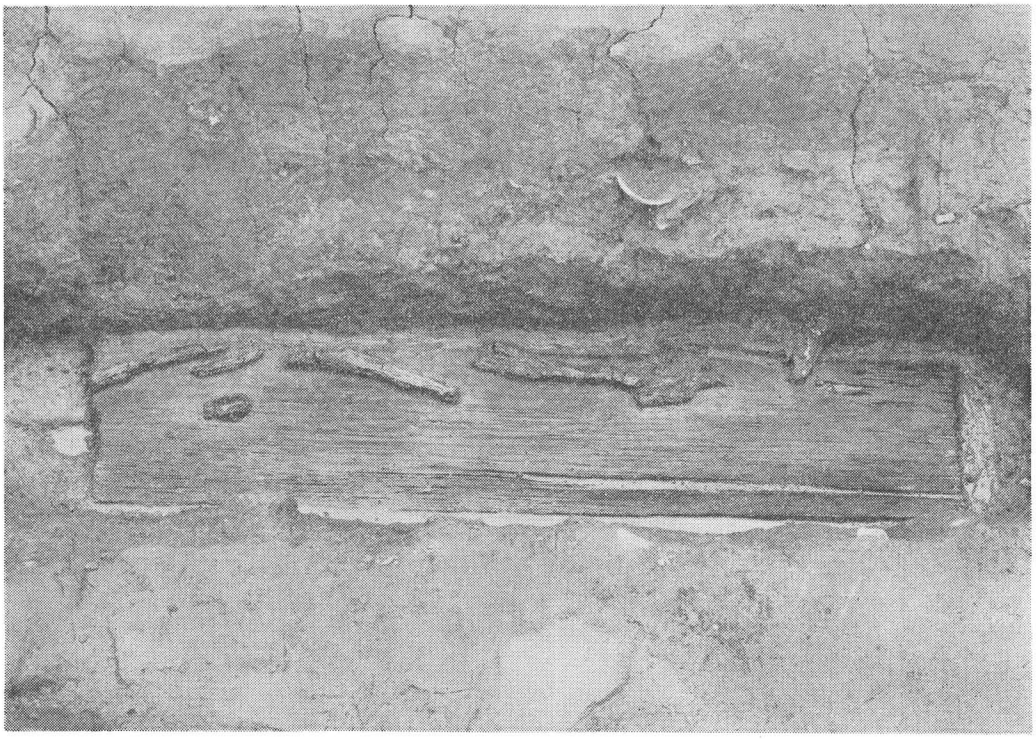
木　棺　墓（第5図）

木棺墓は、B—8地区の第3層上面から第4層を掘り込んだ面で一基検出した。長方形を呈

する掘形の残存主軸の長さ1.9*m*、幅70㎝、深さ4.7㎝を測る。主軸方位は磁北を示す。木棺の構造は木蓋と底板を有するものであったが側板と木口板をもたないものであった。

木蓋は柄穴を有する3枚の割板で構成する。木蓋の長軸内側両端部に角材を設置して鉄釘で木蓋を固定している構造である。板1枚の長さは1.2*m*、幅25㎝、厚み0.5㎝前後を測る板材を3枚で構成している。底板は残存状態も良好であった。長さは1.3*m*、幅26㎝、厚み2㎝を測るもので、マサ目のものの転用材であった。

被葬者の埋葬頭位は北位を示す。墓壙底板面に遺存する人骨の残存状況は、下顎骨、上腕骨、大腿骨、脛骨が底板西側で残存していた。人骨の性別、年令等については不明である。棺内には埋葬遺物がなく、瓦器細片を微量に含んでいた程度である。所属年代については土壙墓と併行関係を有する可能性もあるが検討する余地を残している。

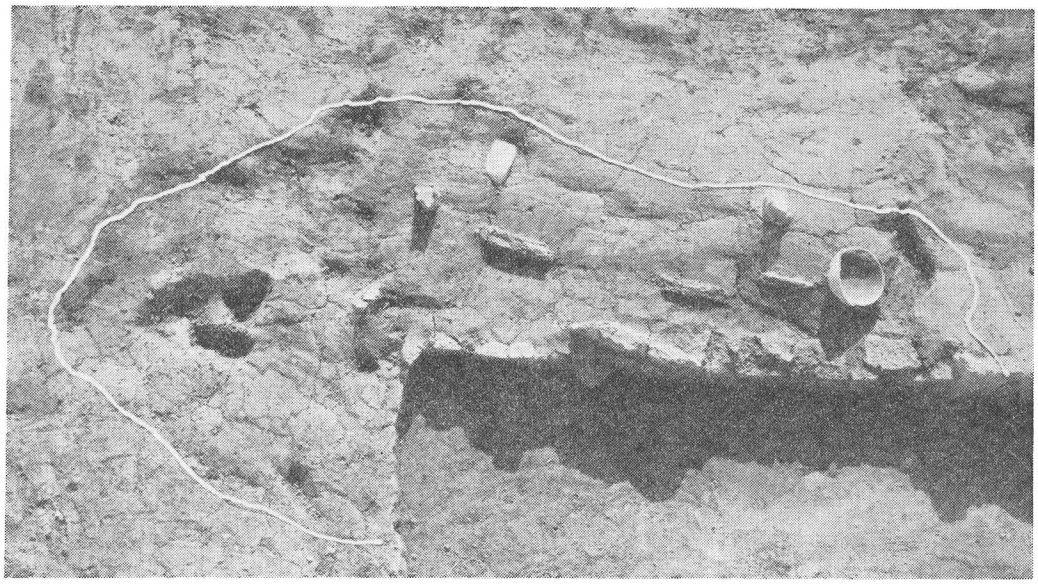


第5図　木棺墓　人骨残存状況（東から）

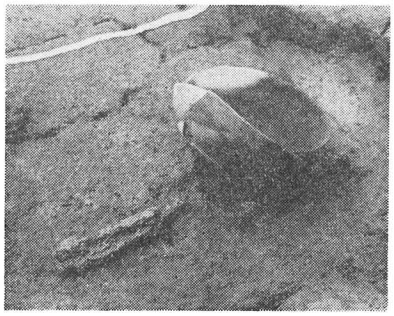
土　壙　墓（第6・7図）

土壙墓はH—9地区の第3層下部で出土した。南北方向に走行する微高地の縁辺部に埋葬施設が位置する。土壙墓の主軸方位は磁北を示す。掘形は長方形を呈すると考えられるが残存状態は良好ではなく、上層遺構面によって墓壙の掘形残存高は水平削除され、底面のみである。掘形の長さ2.6*m*、幅1.2*m*、深さ10*cm*を測る。

被葬者の埋葬頭位は北位を示し、墓壙底面に人骨が部分的に残存していた。頭位の西側に埋葬遺物が積み重ねた状態で黒色土器B類、瓦器椀（楠葉型）、土師質皿が埋置されていた。埋葬遺物の年代は、12世紀初頭期に比定されよう。



第6図　土壙墓　人骨残存出土状況（東から）



第7図　瓦器埦出土状況（東から）

第8図　蔵骨器断面実測図

蔵骨器（第8図）

蔵骨器は、F－2地区で検出した。埋置状態は南北方向に走行する微高地の縁辺部に位置し、第3層下部から第4層を掘り込んでいる。

東播磨地域で生産したと考えられる須恵器の長頸壷を転用している。蔵骨器の蓋には土師器皿を転用している。器内には人骨残存は認められなかった。

蔵骨器の年代は、9世紀後半期以降に比定されると考えられる。

円形土壙３（第12・13・14図）

円形土壙は、Ｉ―９地区の第４層面で検出した。直径2.6ｍ、深さ1.1ｍを測る。埋土堆積は３層に区分され、暗青灰色の砂質粘土、植物遺体層からなる互層である。埋土遺物は上・下層にかけて多類の器種構成が認められ、須恵器、土師器、加工材類など多量に廃棄されていた。

埋土遺物の年代は６世紀後半期に比定されよう。

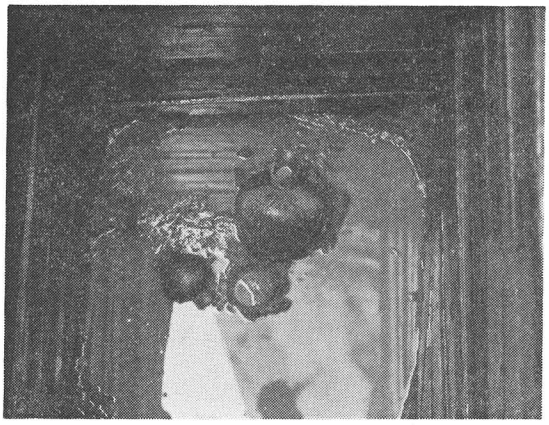
土　壙　５（第15・16図）

この土壙は、H―13地区の第３層下部から第４層を掘り込んでいる不規則な土壙である。長辺3.5ｍ、短辺2.1ｍ、深さ0.5ｍを測る。埋土堆積は、第２層に区分され、灰色の粘質土層からなっている。埋土遺物は多数の器種構成が認められ、須恵器、土師器類が廃棄されていた。埋土遺物の大部分は６世紀後半に比定されるが、型式差異を示す混在遺物も少量あった。

井　戸　１（第９・10図）

横浅柄構造を有する方形の井戸である。

井戸は、Ｅ―９地区の第３層下部で検出された。第３層下部から下層の自然堆積層を掘り込む掘形は円形を呈し、直径2.2ｍ、掘形底面までの深さ2.3ｍ、井戸枠材の一辺1.5ｍ、枠長1.9ｍを測る。横枠材は横85cm、縦14cm、厚み４cm内外の枠板を14段で構成している。

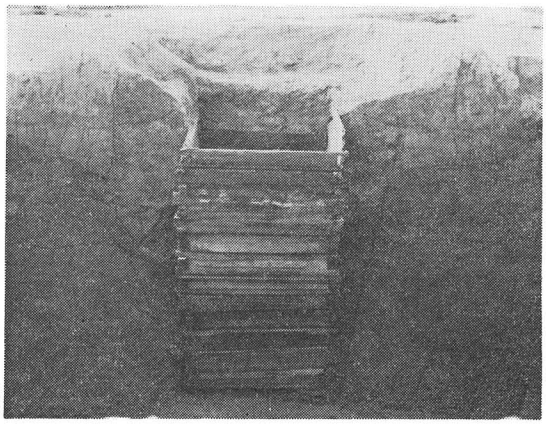


第９図　井戸１　土器出土状況（東から）

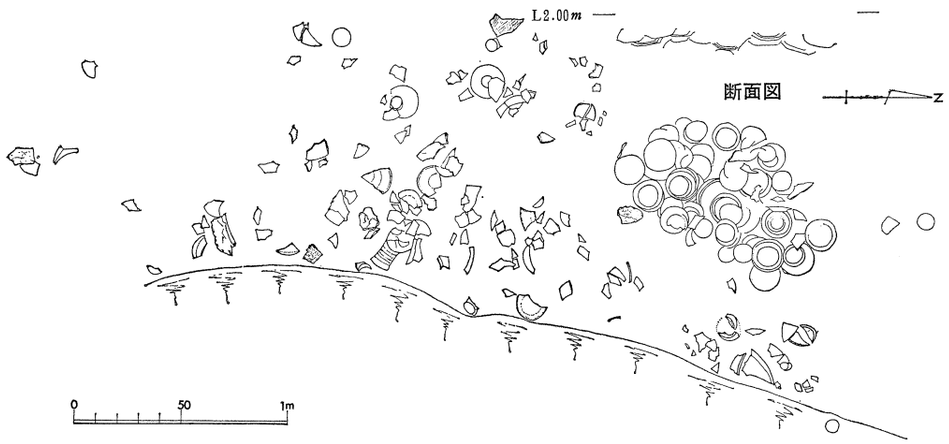
井戸枠材（ヒノキ）の残存状態は良好で建築部材を転用しており、枠材の一部には三角形に削った木材を使用したものもみられた。

井戸枠内の埋土遺物は、須恵器、土師器、瓦、鉄鎌先、自然遺物などが埋土層より出土している。埋土の上層遺物は型式差異を示す土器遺物が混在するが、井戸底面においては８世紀後半期に比定される灰釉陶器、須恵器、三重圏文鐙瓦などが投棄されていた。投棄遺物からの年代は８世紀後半段階に位置づけられ、８世紀後半期以降この井戸は廃絶をむかえたと想定できよう。

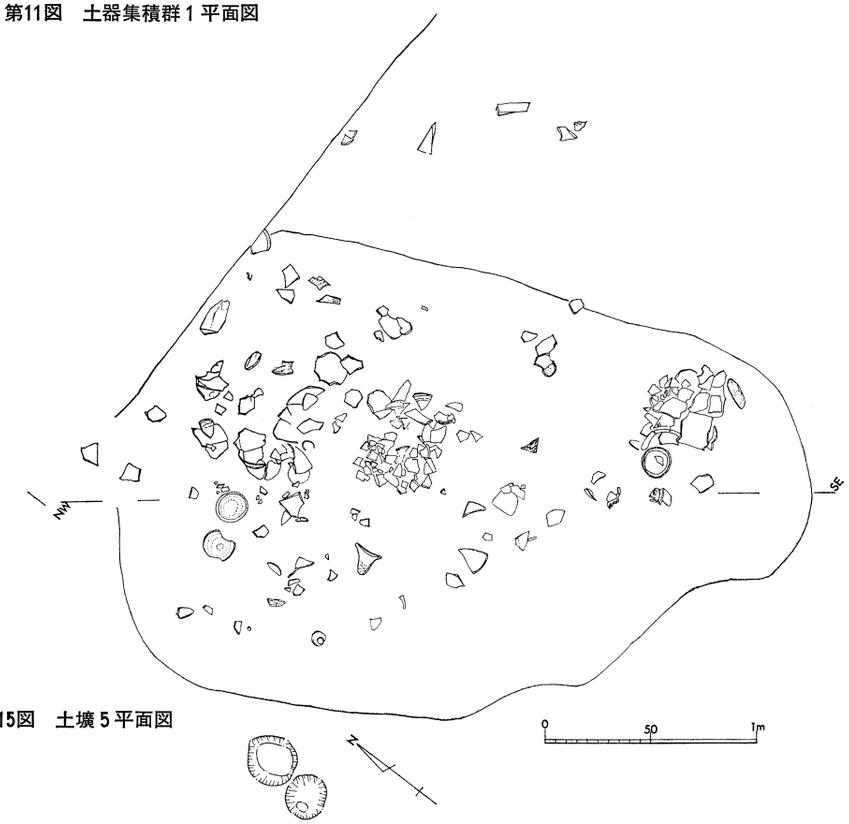
（橋本）



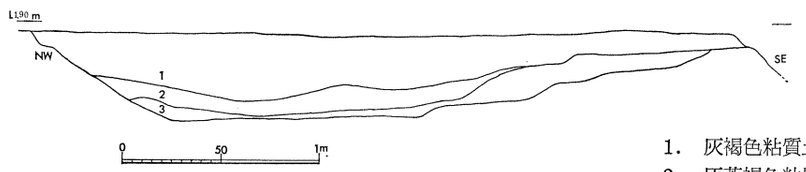
第10図　井戸１　井戸断面状況（南から）



第11図　土器集積群1平面図

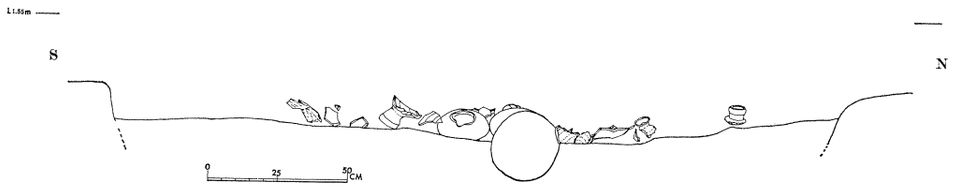


第15図　土壙5平面図

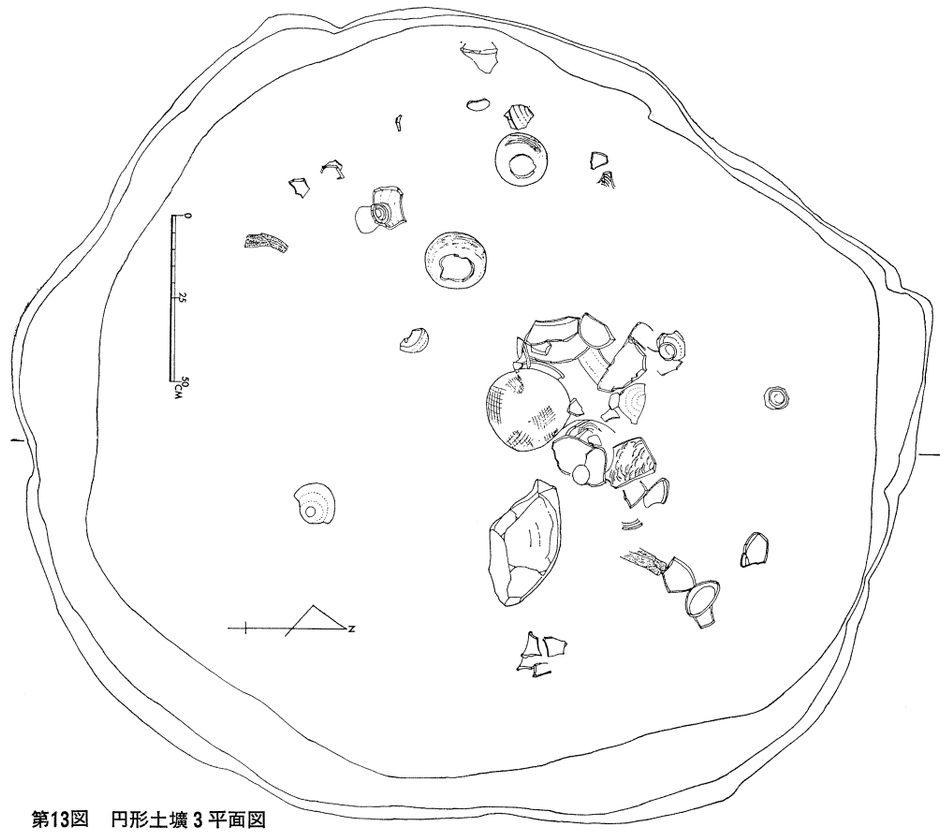


第16図　土壙5層序断面図

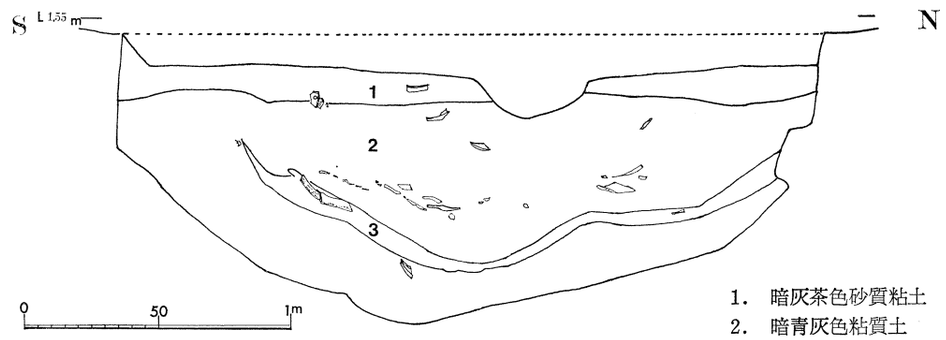
1.　灰褐色粘質土
2.　灰茶褐色粘質土
3.　暗茶褐色粘質土



第12図　円形土壙3立面図



第13図　円形土壙3平面図



第14図　円形土壙3層序断面図

1.　暗灰茶色砂質粘土
2.　暗青灰色粘質土
3.　植物腐敗帯層

4　出土遺物の観察表

土器集積群１出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	形態手法の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1-1	土師器 小皿	口径 9,6 器高 0.8	底部は平坦で口縁部は垂直気味に立ちあがり、端部は折り返している。 内面は横ナデ、外面は未調整。	微砂粒を含む	淡橙色	良好	
1-2 17-D	土師器 小皿	口径 9.6 器高 1.2	底部は平坦で口縁部は垂直気味に立ちあがり、端部は折り返している。 内面は横ナデ、外面は未調整。	密	灰白色ところによって淡橙色	良好	
1-3	土師器 小皿	口径 9.7 器高 1.4	口縁部は外上方にのびて端部はやや肥厚して内側に折り返す。 底部中央はやや上げ底気味になる。 内外面とも横ナデ調整。	微砂粒を含む	淡黄褐色	良好	
1-4	土師器 小皿	口径 9.1 器高 1.3	口縁部は内弯しつつ外上方にのびて端部でやや肥厚して外側に屈曲する。 内面及び外面の口縁部を横ナデ。 底部外面は未調整。	微砂粒を若干含む	明褐色	良好	
1-5	土師器 小皿	口径 9.9 器高 1.1	口縁部は外上方にまっすぐにのび端部でやや外方に屈曲する。 底部はやや上げ底気味になる。 内外面とも横ナデ調整。	微砂粒を若干含む	淡黄褐色	良好	
1-6	土師器 小皿	復元口径 9.7 器高 1.4	口縁部は外上方にのびて端部でやや外方に屈曲し、内面に凹線を施す。底部はほぼ平底である。内面と外面の口縁部は横ナデ、外底面は未調整である。	微砂粒を若干含む	淡褐色	普通	
1-7	土師器 小皿	口径 9.6 器高 1.3	口縁部は外上方にやや内弯しつつ短くのび、端部は丸くおさめて内側に凹線を施す。底部中央はわずかに上げ底気味になり器壁も薄くなる。内面及び外面口縁部に強い横ナデを施す。	微砂粒を若干含む	淡橙色	良好	
1-8	土師器 小皿	口径 9.8 器高 1.2	口縁部は外方に屈曲し、端部に平坦面をもつ。底部はやや上げ底気味となる。内面及び外面口縁部は強い横ナデで調整する。	密	淡褐色	良好	
1-9	土師器 小皿	口径 9.5 器高 1.5	口縁部は内弯しつつ外上方にのびて端部で外方に屈曲し、さらに内側に折り曲げている。口縁端部内側に凹線を施す。 底部はやや上げ底気味である。内外面とも横ナデで調整する。	微砂粒を若干含む	黄褐色	良好	

図版番号	器種	法量(cm)	形態・手法の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1-10	土師器小皿	口径 9.9 器高 1.9	口縁部はまっすぐに外上方にのび、端部は上方につまみ上げている。 底部は中央が上げ底になる。内外面とも横ナデで調整する。	微砂粒を若干含む	淡黄褐色	良好	
1-11	土師器小皿	口径 10.0 器高 1.4	口縁部はまっすぐに外上方にのびて端部で外方に屈曲し、内側に凹線を施す。底部は平底である。 内面及び外面口縁部は横ナデで調整する。	微砂粒を若干含む	淡褐色	良好	
1-12	土師器小皿	復元口径 9.6 器高 1.7	口縁部はわずかに内弯しつつ外上方にのび、端部はやや肥厚して外方に屈曲し、内面に凹線を施す。 底部は丸底気味である。 内面及び外面口縁部を強い横ナデで調整する。	微砂粒を含む	淡橙色	良好	
1-13	土師器小皿	口径 9.8 器高 1.7	口縁部は内弯気味に外上方へのびて端部で外方に屈曲し、さらに内側へ折り曲げる。底部は丸底気味の平底である。内外面とも横ナデ調整する。	微砂粒を若干含む	淡黄褐色	良好	
1-14	土師器小皿	口径 9.6 器高 1.4	口縁部は外上方へ短くのびて外方に屈曲し、端部でやや肥厚して内側に凹線を施す。 内面と外面口縁部は横ナデで調整する。	微砂粉を若干含む	淡褐色	良好	
1-15	土師器小皿	口径 9.6 器高 1.9	口縁部は内弯しつつ外上方へのびて端部で外方に屈曲し、内側に凹線を施す。 内面と外面口縁部は横ナデで調整する。	微砂粒を若干含む	乳褐色	良好	
1-16	土師器小皿	口径 9.8 器高 1.7	口縁部はわずかに屈曲しつつ外上方へのび、端部は丸くおさめる。底部は丸底気味である。 内面と外面口縁部は横ナデで調整する。	微砂粒を若干含む	淡黄褐色	良好	
1-17	土師器小皿	口径 9.4 器高 1.3	口縁部はまっすぐ気味に外上方へのび、端部でわずかに外方へ屈曲し、内側に凹線を施す。口縁端部の外側もわずかに凹線状をなしている。 内面と外面口縁部は横ナデで調整し、底部外面は未調整である。	密	乳褐色	良好	
1-18	土師器小皿	口径 10.1 器高 1.9	口縁部は内弯気味に外上方へのび、端部は丸くおさめて内側に凹線を施す。底部は平底である。	密	淡褐色	良好	

図版番号	器種	法量(cm)	形態・手法の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1-19	土師器 小皿	口径 9.5 器高 1.5	口縁部はやや内弯しつつ外上方にのび、端部で外方に屈曲してさらに上方につまみあげる。底部は丸底気味である。内外面とも横ナデで調整する。	微砂粒を若干含む	淡黄褐色	良好	
1-20	土師器 小皿	口径 9.8 器高 1.6	口縁部はわずかに外反しつつ外上方にのびて、端部は丸くおさめ、内側に凹線を施す。底部は平底である。内外面とも横ナデで調整する。	微砂粒を含む	淡橙色	良好	
1-21	土師器 小皿	口径 10.0 器高 1.4	口縁部はわずかに外反しつつ外上方にのびて、端部は丸くおさめ、内側に凹線を施す。底部は平底である。内外面とも横ナデで調整する。	微砂粒を含む	淡橙色	良好	
1-22	土師器 小皿	口径 9.4 器高 1.4	口縁部は内弯しつつ外上方にのびて端部で外方に屈曲し、内側に凹線を施す。底部は平底である。内面と外面口縁部は横ナデで調整する。	微砂粒を若干含む	淡橙色	良好	
1-23	土師器 小皿	口径 10.0 器高 1.5	口縁部は内弯しつつ外上方にのびて端部で外方に屈曲し、内側に凹線を施す。平底である。内面と外面の口縁部は横ナデで調整する。	微砂粒を若干含む	淡橙色	良好	
1-24	土師器 小皿	口径 9.9 器高 1.5	口縁部はまっすぐ外上方にのびて端部でわずかに外方に屈曲し、丸くおさめる。口縁端部内側に凹線を施す。底部は平底である。内外面とも横ナデで調整する。	微砂粒を若干含む	淡黄色	良好	
1-25	土師器 小皿	口径 9.4 器高 1.6	口縁部はまっすぐに外上方にのびて端部で外方に屈曲し、内側に凹線を施す。口縁端部は面をなしている。底部は平底である。内面と外面口縁部は横ナデで調整する。	密	淡橙色	良好	
1-26	土師器 小皿	口径 9.5 器高 1.4	口縁部はやや内弯しつつ外上方にのびて端部で外方に屈曲し、内側に凹線を施す。底部は丸底気味である。内面と外面口縁部は横ナデで調整する。	密	淡橙色	良好	
1-27	土師器 小皿	口径 9.7 器高 1.4	口縁部は短く外上方にのびて、端部で外方に屈曲し、内側に凹線を施す。底部は平底である。内外面とも横ナデで調整する。	微砂粒を含む	淡橙色	良好	

図版番号	器種	法量 (cm)	形態・手法の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1-28	土師器 小皿	口径 9.1 器高 1.4	口縁部は短く外上方にのびて、端部で外方に屈曲し、丸くおさめる。底部はいびつな平底である。内外面とも横ナデで調整する。	微砂粒を若干含む	淡黄褐色	良好	
1-29	土師器 小皿	口径 9.7 器高 1.2	口縁部は短く外上方にのびて、端部で外方に屈曲し、内側に凹線を施す。底部は平底である。内面と外面口縁部は横ナデで調整し、底部外面は不定方向のナデを行う。	微砂粒を多く含む	淡橙色	良好	
1-30	土師器 小皿	口径 10.0 器高 1.1	口縁部はやや外反しつつ外上方にのびて端部は丸くおさめ、内側に凹線を施す。底部は平底である。内外面とも横ナデで調整する。	微砂粒を含む	淡橙色	良好	底部に藁状の押圧痕がある。
1-31	土師器 小皿	口径 8.9 器高 1.6	口縁部は短く外上方にのびて端部で外方にわずかに屈曲する。底部は丸みをおびた平底である。内外面とも横ナデで調整する。	微砂粒を若干含む	淡黄褐色	良好	
1-32	土師器 小皿	口径 10.0 器高 1.5	口縁部は内弯しつつ外上方にのびて端部で外方に屈曲し、内側に凹線を施す。底部は平底である。内外面とも横ナデで調整する。	密	淡橙色	良好	
1-33	土師器 小皿	口径 9.2 器高 1.6	口縁部は内弯しつつ外上方にのびて端部で外方に屈曲し、内側に凹線を施す。底部は丸みを帯びた平底である。内面と口縁部外面は横ナデ、底部外面は不定方向のナデで調整する。	密	乳褐色	良好	
1-34	土師器 小皿	口径 9.8 器高 1.7	口縁部はわずかに内弯しつつ外上方にのびて、端部で外方にやや屈曲し、内側に凹線を施す。底部は丸底に近い。内面と外面口縁部は横ナデで調整する。	微砂粒を若干含む	淡橙色	良好	
1-35	土師器 小皿	口径 9.9 器高 1.5	口縁部に内弯しつつ外上方にのびて、端部で外方に屈曲し、丸くおさめる。底部は平底である。内面及び外面口縁部は横ナデで調整する。	密	橙色 一部薄紅色	良好	
1-36	土師器 小皿	口径 9.2 器高 1.2	口縁部は内弯しつつ外上方にのびて、端部は丸くおさめる。底部は平底である。外底面に若干の凹凸がある。内面及び外面口縁部は横ナデで調整する。	微砂粒を含む	橙色	良好	

図版番号	器種	法量 (cm)	形態・手法の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1-37	土師器 小皿	口径 9.9 器高 1.5	口縁部はまっすぐに外上方にのび端部は丸くおさめて内側に凹線を施す。底部は平底である。内面及び外面口縁部は横ナデで調整する。	微砂粒を若干含む	淡黄色	良好	
1-38	土師器 小皿	口径 9.7 器高 1.5	口縁部は内弯しつつ外上方にのび、端部は外方に屈曲して内側に凹線を施す。底部は丸底気味の平底である。内面と外面口縁部は横ナデで調整する。	微砂粒を若干含む	淡橙色	良好	
1-39	土師器 小皿	口径 10.0 器高 1.8	口縁部は内弯しつつ外上方にのび、端部は外方に屈曲して内側に凹線を施す。底部は丸底に近い。内外面とも横ナデで調整する。	微砂粒を含む	灰白色	良好	
1-40	土師器 小皿	口径 9.8 器高 1.5	口縁部は内弯しつつ外上方にのび、端部は外方に屈曲して内側に凹線を施す。底部は丸底に近い。内面及び外面口縁部は横ナデで調整する。	密	灰白色	良好	
1-41	土師器 小皿	口径 10.0 器高 1.4	口縁部はわずかに内弯しつつ外上方にのび、端部は丸くおさめて、内側に凹線を施す。底部は丸底気味の平底である。内外面とも横ナデで調整する。	微砂粒を含む	淡橙色	良好	
1-42	土師器 小皿	口径 9.5 器高 1.8	口縁部は内弯しつつ外上方にのび、端部で外方にやや屈曲して内側に凹線を施す。底部は丸底気味の平底である。内面と外面口縁部は横ナデで調整する。	密	乳褐色	良好	
1-43	土師器 小皿	口径 9.4 器高 1:7	口縁部は内弯しつつ外上方にのびて端部で外方にわずかに屈曲し、内側に凹線を施す。底部は平底である。内面と外面口縁部は横ナデで調整する。	密	淡褐色	良好	
1-44	土師器 小皿	口径 10.0 器高 1.6	口縁部はわずかに内弯しつつ外上方にのびて、端部は丸くおさめて内側に凹線を施す。底部は丸底気味の平底である。内面と外面口縁部は横ナデで調整する。	密	明褐色	良好	
1-45	土師器 小皿	口径 9.7 器高 1.7	口縁部はわずかに内弯しつつ外上方にのびて端部は丸くおさめる。底部は丸底に近い。内外面とも横ナデで調整する。	微砂粒を若干含む	淡黄褐色	良好	

図版番号	器種	法量 (cm)	形態・手法の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1-46	土師器 小皿	口径 9.8 器高 1.5	口縁部はわずかに内弯しつつ外上方にのびて端部でやや肥厚して丸くおさめ、内側に凹線を施す。底部は丸みをおびた平底である。内面と外面口縁部を横ナデで調整する。	微砂粒を若干含む	淡橙色	良好	
1-47	土師器 小皿	口径 9.4 器高 1.6	口縁部は内弯しつつ外上方にのびて端部は丸くおさめる。底部は丸底に近い。内面と外面口縁部を横ナデで調整する。	微砂粒を若干含む	淡橙色	良好	
1-48	土師器 小皿	口径 9.8 器高 2.0	口縁部は内弯しつつ外上方にのびて端部は丸くおさめ、内側に凹線を施す。底部は丸底に近い。内面と外面口縁部は横ナデで調整する。	微砂粒を若干含む	淡橙色	良好	
1-49	土師器 小皿	口径 9.7 器高 1.8	口縁部はわずかに内弯しつつ外上方にのびて、端部は丸くおさめる。底部は丸底に近い。内面および外面口縁部は横ナデで調整する。	微砂粒を若干含む	淡橙色	良好	
1-50	土師器 小皿	口径 10.0 器高 1.8	口縁部はわずかに内弯しつつ外上方にのびて、端部は丸くおさめ、内側に凹線を施す。底部は平底である。内面および外面口縁部は横ナデで調整する。	密	淡橙色	良好	
1-51	土師器 小皿	復元口径 9.6 器高 1.7	口縁部は内弯しつつ外上方にのびて、端部は丸くおさめる。底部は丸底に近い。内面及び外面口縁部は横ナデで調整する。	微砂粒を含む	にぶい黄橙色	良好	
1-52	土師器 小皿	口密 9.4 器高 1.8	口縁部は内弯しつつ外上方にのびて端部は丸くおさめ、内側に弱い凹線を施す。底部は丸底に近い。内面と外面口縁部は横ナデで調整する。	微砂粒を若干含む	淡黄褐色	良好	
1-53	土師器 小皿	最大口径 9.9 最小口径 8.7 器高 1.8	口縁部はまっすぐに外上方にのびて端部は丸くおさめ、内側に弱い凹線を施す。底部は平底である。内外面とも横ナデで調整する。	微妙粒を若干含む	淡黄褐色	良好	平面は隋円形を呈す。
1-54	土師器 小皿	口径 9.7 器高 1.8	口縁部は内弯しつつ外上方にのびて、端部は丸くおさめて内側に凹線を施す。底部は平底である。内外面とも横ナデで調整する。	微砂粒を含む	淡橙色	良好	

図版番号	器種	法量 (cm)	形態・手法の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1-55	土師器 小皿	復元口径 9.9 器高 2.3	口縁部は内弯しつつ外上方にのびて端部は丸くおさめ、内側に弱い凹線を施す。底部は丸底に近い。内面及び外面の口縁部は横ナデで調整する。	微砂粒を若干含む	淡褐色	良好	
1-56	土師器 小皿	口径 9.6 器高 1.9	口縁部は内弯しつつ外上方にのびて端部は丸くおさめ、内側に凹線を施す。底部は丸みを帯びた平底である。内面と外面口縁部は横ナデで調整し、底部外面は未調整である。	密	淡橙色	良好	
1-57	土師器 大皿	復元口径 19.8 残存高 3.4	口縁部は内弯しつつ外上方にのびて端部でやや外反し、丸くおさめる。内外面とも横ナデで調整する。	微砂粒を多く含む	淡桃色	良好	
1-58	土師器 大皿	復元口径 18.4 残存高 3.2	口縁部は段をもって外上方にのびて端部はやや肥厚して丸くおさめる。内面と外面口縁部上半は横ナデで調整する。	密	淡桃色	良好	
2-1	土師器 大皿	復元口径 13.9 残存高 2.4	口縁部は外上方へのびて、端部は丸くおさめ、体部はまっすぐ口縁部へつづくが口縁部との境でわずかに屈曲している。口縁部内外面とも、強い横ナデ調整する。	微砂粒を若干含む	淡褐色	良好	
2-2	土師器 大皿	口径 15.6 器高 3.1	体部は丸味をもって口縁部へつづき、口縁部は外上方へまっすぐにのびる。口縁端部は丸くおさめ、底部は平底である。外面口縁部は横ナデ調整する。	微砂粒を含む	淡橙色	良好	
2-3	土師器 大皿	復元口径 15.0 器高 3.0	体部はゆるやかに湾曲して口縁部は斜上方へまっすぐにのびる。口縁端部は丸くおさめ、底部は平底である。内外面とも口縁部は横ナデ調整する。	微砂粒を含む	淡橙色	良好	
2-4	土師器 大皿	口径 15.2 器高 3.1	体部はゆるやかに内弯しつつ外上方にのび、端部は丸くおさめる。一部口縁端部は僅かに外反する。底部は平底である。内面は横ナデで調整し、外面口縁部は強い横ナデ調整する。	1㎜大の微砂粒を多く含む	黄橙色	良好	
2-5	土師器 大皿	復元口径 15.3 器高 2.5	体部はゆるやかに内弯しつつ外上方にのび、端部は丸くおさめる。底部は平底に近い。外面は横ナデで調整する。	微砂粒を若干含む	淡褐色	良好	

図版番号	器種	法量 (cm)	形態・手法の特徴	胎土	色調	焼成	備考
2-6	土師器 大皿	口径 15.3 器高 2.7	体部はゆるやかに内弯しつつ外上方にのび端部は丸くおさめる。底部は平底である。内面及び外面口縁部への強い横ナデ調整、外面底部は未調整である。	微砂粒を含む	淡桃色	良好	
2-7	土師器 大皿	口径 15.1 器高 3.1	体部は内弯しつつ外上方にのび、口縁部はやや肥厚し、端部は丸くおさめる。底部は平底である。外面及び内面は強い横ナデで調整する。	微砂粒を含む	灰白色	良好	
2-8	土師器 大皿	口径 14.9 器高 2.9	体部はゆるやかに湾曲して口縁部は外上方へまっすぐにのび、端部を丸くおさめる。底部は平底である。体部外面及び内面は横ナデ調整、外面底部は未調整である。	密	灰白色	良好	
2-9	土師器 大皿	口径 14,3 器高 3.9	体部はゆるやかに内弯しつつ外上方にのび、端部を丸くおさめる。底部は平底である。内外面とも横ナデ調整する。	微砂粒を含む	淡褐色	良好	
2-10	土師器 大皿	口径 14.9 器高 3.3	体部はゆるやかに内弯しつつ外上方にのび、端部はわずかに外反する。底部はやや丸みをもった面になる。内面及び外面口縁部は横ナデ調整する。	微砂粒を多く含む	淡橙色	良好	
2-11	土師器 大皿	口径 14.6 器高 3.3	体部はゆるやかに内弯しつつ外上方にのび、端部を丸くおさめる。底部は僅かに丸みをもつ平底である。内面及び外面体部は横ナデ調整する。	微砂粒を含む	淡橙色	良好	
2-12	土師器 大皿	口径 15.4 器高 3.4	体部はゆるやかに内弯しつつ外上方にのび、端部を丸くおさめる。底部は僅かに丸みをもつ平底である。内面及び外面口縁部は横ナデ調整する。	微砂粒を含む	淡橙色	良好	
2-13	土師器 大皿	口径 14.7 器高 3.6	体部はゆるやかに内弯しつつ外上方にのび、端部は僅かに外反する。底部は僅かに丸みをもつ平底である。内面及び外面口縁部は横ナデ調整する。	微砂粒を含む	淡橙色	良好	
2-14	土師器 大皿	口径 14.9 器高 3.0	体部はゆるやかに内弯しつつ外上方にのび、端部は丸くおさめる。底部はやや丸みをもった面になる。内面及び外面口縁部は横ナデ調整する。	微砂粒を含む	淡橙色	良好	

図版番号	器種	法量 (cm)	形態・手法の特徴	胎土	色調	焼成	備考
2-15	土師器 大皿	口径 14.9 器高 3.0	体部はわずかに外反気味にのび、底部は平底に近い。内外面とも横ナデ調整する。	微砂粒を含む	黄褐色	良好	外面に赤い火ダスキが走っている。
2-16	土師器 大皿	口径 14.6 器高 3.0	体部はゆるやかに内弯しつつ外上方にのび、口縁部はやや肥厚し、端部は僅かに外反する。底部はやや丸みを持つ平底である。内面及び外面体部上半への横ナデ調整。	微砂粒を若干含む	淡褐色	良好	
2-17	土師器 高台付大皿	復元口径 20.0 残存高 5.1 高台径 7.8～8.9	体部から口縁部にかけて大きく外反し、端部は丸くおさめる。底部には高台がはりつけられている。内外面とも横ナデ調整する。	微砂粒を多く含む	淡橙色	普通	
2-18	土師器 椀	復元口径 15.9 器高 4.8 復元高台径 7.3	底部から内弯気味に体部が外上方へのび、口縁端部は丸くおさめる。外面口縁部は横ナデで調整し、体部は暗文を施してのち、横ナデ調整する。内面にも暗文を施す。底部に外側に開く低い高台が付き先端を外側につまみ上げている。	1mm～2mm大の砂粒を若干含む	淡褐色	普通	暗文の幅 内面1mm～2mm 外面3mm 器高指数30.2
2-19	土師器 椀	復元口径 16.6 器高 5.7 復元高台径 7.4	体部はゆるやかに内弯しつつ外上方にのび、口縁端部は外反し、丸くおさめる。外面口縁部は横ナデで調整し、体部に暗文を施す。内面にも暗文を施す。底部に外側に開く高台が付く。	微砂粒を若干含む	内面 淡灰色 外面 淡黄褐色	良好	暗文の幅 内面 2.5mm 外面 3mm 器高指数34.3
2-20	黒色土器 椀	復元口径 14.6 器高 5.1 復元高台径 5.4	体部はゆるやかに内弯しつつ外上方にひらく。口縁端部内面には沈線が巡る。外面口縁部は横ナデで調整し、内面はほぼ密な暗文を施す。底部内面には平行線状の暗文を少し施しており、一部に細かな平行線状文の上をナデが残る。底部に外側に開く低い高台が付く。	密	漆黒色	良好	暗文の幅 1.5mm B類 器高指数34.9
2-21	瓦器 椀	復元口径 16.8 器高 5.6 復元高台径 5.4	底部から内弯気味に外上方へのび、口縁端部内面に沈線が巡る。内面は密な暗文で、外面口縁部は横ナデで調整し、省略気味の暗文を施す。底部にやや外側に開く断面台形の低い高台が付く。底部内面には連結輪状の暗文を施す。	微砂粒を含む	黒灰色	普通	暗文の幅 内面 1.5mm 外面 3mm 器高指数33.3

図版番号	器種	法量(cm)	形態・手法の特徴	胎土	色調	焼成	備考
2-22	瓦器小皿	復元口径 10.0 残存高 2.1	口縁部は内弯しつつ外上方へのび、端部で外反気味になり丸くおさめる。底部は平底である。口縁部内外面は横ナデ調整ののち、外面に暗文を施す。底部内外面は、不定方向のナデののち、内面に連結輪状の暗文を施す。	密	漆黒色	良好	暗文の幅 内面 3.5mm 外面 2mm
2-23	瓦器椀	復元口径 13.8 器高 4.8 復元高台径 5.0	底部から内弯気味に体部がのび、口縁部はほぼまっすぐにおわっている。口縁端部内面に沈線が巡る。外面口縁部は横ナデで調整し、内面は密な暗文を施す。底部に断面三角形の高台が付く。	微砂粒を含む	黒灰色	やや軟質	暗文の幅 1mm 器高指数34.8
2-24	瓦器椀	復元口径 14.4 残存高 5.1	体部は内弯しつつ外上方にのび、口縁端部内面には深めの沈線が巡る。外面口縁部は横ナデで調整する。内面は密な暗文で、外面はわずかに暗文を施す。	密 但し5～6mm大の小石を1点含む	暗灰色	普通	暗文の幅 内外面1mm
2-25	瓦器椀	復元口径 15.8 残存高 5.3	体部は内弯しつつ外上方にのび、口縁端部内面には沈線が巡る。内面は密な暗文で外面も口縁部から体部上半にかけて密な暗文を施し、体部下半にも若干間隔があくが、暗文を施している。外面体部には指頭圧痕がある。	密	内面銀黒色 外面漆黒色	良好	暗文の幅 内面 1.5mm 外面 1mm
2-26	瓦器椀	復元口径 15.2 器高 5.5 復元高台径 5.3	底部から内弯気味に外上方へのび、口縁部はやや肥厚し、端部はやや平坦面になり、端部内面には沈線が一部のみに施されている。内面は密な暗文で、外面は若干間隔はあくが、暗文を施している。底部に断面三角形の高台が付く。底部内面は横方向のナデののち、平行線状の暗文を施す。	1mm以下の微砂粒を多く含む	内面漆黒色 外面漆黒色 灰白色	良好	暗文の幅 内面 2mm 外面 1.5mm 器高指数36.2
2-27	瓦器椀	復元口径 16.0 器高 5.6 復元高台径 6.6	底部から内弯しつつ体部がのび、口縁部はまっすぐ外上方に開く。口縁端部内面には沈線が巡る。内面は密な暗文で、外面口縁部は横ナデで調整し、口縁部から体部下半にまで若干間隔はあくが暗文を施す。外面体部の指頭圧痕は顕著である。底部に断面三角形の高台が付く。底部内面には平行線状(鋸歯状)の暗文を施す。	密	内面漆黒色 外面黒灰色 灰白色	普通	暗文の幅 1.5～2mm 暗文は3分割 器高指数35.0

図版番号	器種	法量 (cm)	形態・手法の特徴	胎土	色調	焼成	備考
3-1	瓦器 椀	口径 15.9 器高 5.5 復元高台径 7.9	体部から内弯して、口縁部へ続き、端部でわずかに稜をなす。口縁端部内面に沈線が巡る。断面三角形の高台が付き、高台よりも底部の方が張り出している。底部外面の中央部はへこんでいる。内面は密な暗文を施し、外面は口縁部は横ナデで、体部は間隔はあくが暗文を施す。底部内面は、斜格子状のくずれた暗文を施す。	1mm以下の微砂粒を多く含む	暗灰色	普通	暗文の幅 1.5～2mm 暗文は3分割 器高指数34.6
3-2	瓦器 椀	復元口径 15.3 器高 6.0 復元高台径 6.4	体部は直線的に外上方にのび、まっすぐ気味の口縁部へ続く。口縁部内面に沈線が巡る。底部に断面台形に近い高台が付く。内面は密な暗文を施し、外面は口縁部は横ナデののち、体部下半にかけて、間隔はあくが暗文を施す。底部内面は平行線状(鋸歯状)の暗文を施す。	やや粗	漆黒色	普通	暗文の幅1mm 暗文は5分割 器高指数39.2
3-3	瓦器 椀	復元口径 14.4 残存高 5.4	体部は内弯気味に外上方へのび、口縁部へ続く。口縁部内面に沈線が巡る。内面は密な暗文を施し、外面は、口縁部は横ナデののち、体部下半にかけて、若干間隔はあくが暗文を施す。	密	淡灰色	普通	暗文の幅1.5mm
3-4	瓦器 椀	口径 15.0 器高 5.5 高台径 5.7	体部から内弯して、口縁部へ続く。口縁部内面に沈線が巡る。底部に断面台形の低い高台が付く。内面は密な暗文を施し、外面は、口縁部は横ナデののち、体部下半にかけて、若干間隔があき無造作な暗文を施す。	1mm以下の微砂粒を若干含む	外面と内面口縁部 灰白色 内面暗灰色	良好	暗文の幅 1mm～2mm 器高指数36.7
3-5	瓦器 椀	口径 15.2 器高 5.1 高台径 5.3	体部から内弯気味に外上方へのび、口縁部へ続く。底部に断面三角形の高台が付く。内面は太い暗文を施し、外面口縁部は横ナデで、体部に太い無造作な暗文を施す。 底部内面は斜格子状の太い暗文を施す。	密	内面銀黒色 外面黒灰色 灰白色	良好	暗文は5分割 器高指数33.6
3-6	瓦器 椀	復元口径 14.6 器高 5.7 復元高台径 4.8	体部は内弯して口縁部へ続く。口縁部でわずかに外反する。底部に外側に開く高台が付く。口縁部内外面は横ナデで、体部内外面に無造作な暗文を施す。底部内面は平行線状に近い暗文を施す。	微砂粒を若干含む	内面黒灰色 灰白色 外面漆黒色	良好	暗文の幅 2mm 器高指数39.0

図版番号	器種	法量 (cm)	形態・手法の特徴	胎土	色調	焼成	備考
3-7 17-B	瓦器 塊	口径 15.7 器高 5.9 高台径 5.8	体部は内弯して、口縁部へ続く。口縁部は外反する。底部に断面方形の安定した高台が付く。口縁部外面は横ナデで、体部内外面は、無造作な太い暗文を施す。底部内面は平行線状の暗文を施す。	微砂粒を若干含む	内面銀黒色 外面黒灰色 淡灰色	良好	暗文の幅 2～3㎜ 暗文は3分割 器高指数37.6
3-8	瓦器 塊	口径 15.7 器高 5.6 高台径 5.3	体部から内弯して口縁部へ続く。口縁部は外反する。底部に断面、一部は方形、一部は三角形の低い高台が付く。内面はナデののち、太い暗文を施す。外面は口縁部は横ナデで、体部上半は無造作な暗文を施す。底部内面は連絡輪状の暗文を施す。	密 0.5㎜の微砂粒を若干含む	内面銀黒色 外面黒灰色	良好	暗文の幅 3～4㎜ 暗文に4分割 器高指数35.7
3-9	瓦器 塊	復元口径 14.2 器高 4.7 高台径 5.0 (高台は完存)	体部から内弯気味に外上方へのび、口縁部へ続く。底部に断面台形の小型の高台が付く。内面はナデののち、体部下半に暗文を施す。外面は口縁部は横ナデで、口縁部から体部上半は暗文を施し、体部下半は指頭圧痕がある。底部内面は斜格子状の暗文を施す。	1㎜以下の微砂粒を若干含む	漆黒色	良好	暗文の幅3㎜ 器高指数33.1
3-10	瓦器 塊	復元口径 16.2 器高 4.9 復元高台径 5.2	体部から内弯して、口縁部へ続く。底部に外側に開くかなり広い平坦面をもつ断面台形の低い高台が付く。内面は横ナデののち、暗文を施す。外面は横ナデののち、口縁部から体部上半まで暗文を施す。	微砂粒を多く含む	漆黒色	良好	暗文の幅 1.5㎜ 暗文は4分割か 器高指数30.2
3-11	瓦器 塊	復元口径 17.0 残存高 4.8	体部は内弯気味にのび、口縁部は大きく外反する。内面は口縁部は横ナデで、体部は不定方向のナデののち暗文を施す。外面は口縁部は横ナデで体部下半は指頭圧痕がある。	密	漆黒色	良好	暗文の幅 3㎜
3-12	瓦器 塊	復元口径 16.4 残存高 4.5	体部は内弯しつつ外上方にのび、口縁部は大きく外反し、外面の口縁部と体部との境に凹線が巡る。口縁部内外面とも横ナデ調整する。体部内面は暗文を無造作に施す。体部外面もやや太目の暗文を施している。	密	内面銀黒色 外面漆黒色	良好	暗文の幅 内面1.5～2㎜ 外面 3㎜

図版番号	器種	法量 (cm)	形態・手法の特徴	胎土	色調	焼成	備考
3-13	瓦器 椀	復元口径 15.5 残存高 4.4	体部は内弯しつつ外上方にのび、端部は平坦面をもつ。外面口縁部は横ナデで調整し、体部は簡単な暗文を施す。内面口縁部は横ナデで調整し、見込みは不定方向ナデ調整をする。内面はナデ調整ののち、無造作に暗文を施す。見込みには斜格子状の暗文を施す。	密	内面銀黒色 外面漆黒色	良好	暗文の幅 内面 2mm 外面 1.5mm 暗文は4か5分割
3-14	瓦器 椀	残存高 2.1 復元高台径 6.6	底部から内弯気味に外上方へのびる。内面は横ナデののち、ほぼ密な暗文を施す。外面も暗文を施す。底部に断面台形の低い高台が付く。底部内面は不定方向ナデののち暗文を施す。	1mm大の微砂粒を多く含む	内面黒灰色 外面灰白色	普通	暗文の幅 内面 2～3mm 外面 2.5mm
3-15	瓦器 椀	残存高 1.4 高台径 4.9	底部から内弯気味に外上方へのびる。外面に暗文を施す。底部に外側に開く断面台形の高台が付く。底部内面は不定方向のナデののち、斜格子状の暗文を施す。	密	内面銀黒色 外面漆黒色	良好	暗文の幅3mm
3-16	瓦器 椀	残存高 2.3 高台径 4.8	体部は内弯しつつ外上方へのびる。内面は暗文を施す。外面に指頭圧痕がある。底部にやや外側に開く断面台形の低い高台が付く。底部内面は不定方向のナデののち、鋸歯状の暗文を施す。	密	漆黒色	良好	暗文の幅 2.5mm
4-1	土師器 甕	復元口径 44.8 残存高 9.15	口縁は「く」の字に外反する。内面口縁部に横方向のくし目あり。内面口頸部に後からつけた跡がある。内面体部と外面はナデ調整。外面は磨滅が著しい。	1～2mmの小石を多量に含む	外面黒褐色 内面淡橙色	普通	
4-2	土師器 甕	復元口径 30.8 残存高 8.5	口縁は「く」の字に外反する。内面口縁部に横方向のハケ目あり。外面口頸部から体部にハケ目あり。外面口縁部はナデ調整。	1～2mmの小石を多数含む	外面黒褐色 内面薄茶色	普通	
4-3	土師器 甕	復元口径 33.5 残存高 7.0	口縁は外上方に大きく開く。内面口縁部に7本／cmのカキ目あり。内面体部と外面口縁部はナデ調整。外面体部にハケ目あり。磨滅が著しい。	微砂粒と1mmの小石を多数含む	暗黄褐色	普通	
4-4	土釜	口径 22.8 残存高 11.8	口縁は短く内傾し、横方向にむく、幅2.5cmの鍔がつく。内外面に指頭圧痕があり。外面体部にハケ目あり。 摂津系	微砂粒を多数含む	暗茶褐色	良好	

図版番号	器種	法量 (cm)	形態・手法の特徴	胎土	色調	焼成	備考
4-5 22-B	土釜	口径 22.0 残存高 13.9	口縁は肥厚し、やや内傾する。横方向にむく幅7.5㎝の鍔がつく。外面は縦方向のハケ目、内面は斜方向のハケ目調整。河内系	微砂粒と1～2㎜程度の小石を多数含む	外面 茶色 黒のスス付着 内面 褐色	良好	
4-6	須恵器鉢	復元口径 33.0 残存高 9.6	口縁はやや肥厚し、体部は斜め下方に下り、底部付近でゆるやかに内弯する。外面体部には凹線文がある。内面はナデ調整。内面に木ノ葉の押圧痕があり。東播系	3㎜程度の小石と微砂粒若干含む	灰色	普通	

円形土壙3出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	形態・手法の特徴	胎土	色調	焼成	備考
5-1	須恵器高坏蓋	口径 15.7 器高 4.7 つまみ径 2.9	天井部はやや高く、中央は平たい。つまみは逆台形で中央が浅くくぼむ。天井部と口縁部との境に凹線が巡る。口縁部は外方に開きながら下る。内外面とも回転ナデ調整。内面中央に同心円タタキあり。	微砂粒を多く含む	灰白色	普通	
5-2	須恵器高坏蓋	復元口径 14.6 残存高 4.7 つまみ径 2.3	天井部は高くて丸い。つまみの跡がついている。口縁部は内弯気味に下る。外面は右廻りのヘラ削りを行ない、その上をナデで消してある。内面は回転ナデ調整。	1㎜以下の白色微砂粒を若干含む	灰白色	良好	
5-3	須恵器坏蓋	口径 14.2 器高 4.8	天井部は高くて丸い。口縁部は下方に下る。外面は回転ヘラ削り。内面は回転ナデ調整。天井部にヘラ記号あり。	微砂粒を若干含む	灰色	良好	ヘラ記号 ／
5-4	須恵器坏蓋	復元口径 14.0 器高 4.5	天井部は高く丸く盛り上る。口縁部は内弯気味に下方に下る。外面は自然釉が付着している。内面の調整は丁寧である。	1～2㎜程度の小砂粒を若干含む	暗灰色	良好	
5-5	須恵器坏身	復元口径 9.4 受部径 11.0 残存高 3.3	たちあがりは中程までは内傾し、以後垂直に伸びる。受部はほぼ水平に外方にのびる。外面に自然釉付着している。内外面ともナデ調整。	2㎜大の小砂粒若干含む	灰白色	良好	

図版番号	器種	法量 (cm)	形態・手法の特徴	胎土	色調	焼成	備考
5-6	須恵器 坏身	復元口径 12.2 受部径 14.4 残存高 3.1	たちあがりは短く内傾し、端部は丸い。受部は外方にのびる。たちあがりと受部の間に沈線が巡る。内面にスス付着。底部外面は回転ヘラ削り。	微砂粒を若干含む	暗灰色	良好	
5-7	須恵器 坏身	復元口径 11.7 受部径 13.6 残存高 3.7	たちあがりはわずかに内傾し、端部にいくほど薄くなっている。受部は外方にのびる。底部外面は回転ヘラ削り。内面はナデ調整。	微砂粒を多く含む 2～3㎜大の小砂粒を若干含む	灰白色	良好	
5-8	須恵器 坏身	復元口径 12.2 受部径 13.9 残存高 2.8	たちあがりは内傾しながら上方にのびる。受部は外方にのびる。内外面ともナデ調整。	微砂粒を若干含む	灰白色	良好	
5-9	須恵器 坏身	復元口径 11.0 受部径 13.2 残存高 3.9	たちあがりは短く内弯しながら上方にのびる。受部はほぼ水平にのびる。底部外面は回転ヘラ削り。内面は沈線が1条巡り、回転ナデ調整である。	微砂粒を多く含む	灰白色	良好	
5-10	須恵器 坏身	復元口径 12.6 受部径 14.7 残存高 4.3	たちあがりは短く内傾しながら上方にのびる。受部は外上方にのびる。底部は深い。底部外面はヘラ削り、内面は沈線が1条巡り、ナデ調整である。	1～2㎜大の小砂粒を若干含む	暗灰色	普通	
5-11	須恵器 坏身	復元口径 12.5 受部径 14.6 残存高 4.2	たちあがりは短く、内傾した後上方にのびる。受部は外上方にのびる。たちあがり、受部共丁寧な調整。	1㎜大の小砂粒を若干含む	灰白色	良好	
5-12	須恵器 坏身	復元口径 11.9 受部径 14.0 器高 3.7	たちあがりは内傾しながらのび端部は丸い。受部は外方にのびる。底部外面は回転ヘラ削り。内面は回転ナデ調整。	一部に3㎜大の小砂粒を含む。 白色微砂粒を若干含む	灰色	良好	
5-13	須恵器 坏身	復元口径 12.0 受部径 14.6 器高 4.2	たちあがりは内傾しながらのびる。端部は丸い。受部は上外方にのびる。底部は深く丸い。底部外面は回転ヘラ削り、内面はナデ調整。	白色微砂粒を若干含む	外面暗灰色 内面灰白色	不良	
5-14	須恵器 坏身	口径 13.2 受部径 15.9 器高 4.5	たちあがりは内傾し、端部は丸くおさめる。受部はやや外下方にのびる。底部外面にヘラ記号あり。底部外面は回転ヘラ削り、内面はナデ調整。	1㎜大の白色小砂粒を含む	灰白色	良好	ヘラ記号 ///////

図版番号	器種	法量 (cm)	形態・手法の特徴	胎土	色調	焼成	備考
5-15	須恵器 坏身	復元口径 14.8 受部径 17.0 器高 4.3	たちあがりは内傾し、端部は丸くおさめる。受部は太く、外方にのびる。底部外面は回転ヘラ削り。中央は未調整。	2㎜位の小砂粒若干含む	灰白色	不良	
5-16	須恵器 坏身	復元口径 15.1 受部径 17.4 残存高 5.1	たちあがりは内傾し、中程より直立気味に長くのびる。受部はやや上方にのびる。内外面ともナデ調整。	微砂粒を多く含む	灰白色	普通	
5-17	須恵器 蓋	復元口径 9.2 器高 6.3	天井部は高くて丸く、口縁部との境目に1条の凹線が巡る。口縁部は内下方に下る。形態は焼成時にゆがんだものと思われる。天井部外面、回転ヘラ削り。天井部内面に釉付着。	1㎜大の小砂粒と微砂粒若干含む	暗灰色	良好	
5-18	須恵器 提瓶	口径 8.2 残存高 11.5	口頸部は外反しながら上方にたちあがる。肩部はなだらかに下外方に下る。口頸部は体部の肩に差し込まれている。内外面とも回転ナデ調整。	微砂粒を多く含む	灰白色	良好	
5-19	須恵器 小型壺	口径 5.4 残存高 6.5	口頸部はゆるやかに外反しながらのびる。肩部は外下方に下り、のち下方に下る。内外面ともナデ調整。	密	淡青灰色	良好	内面に黒茶色のものが付着うるしか？
5-20	須恵器 短頸壺	復元頸部径 8.4 胴部最大径 14.8 残存高 9.8	口頸部は上方にのび、中位から外反する。端部は欠損している。肩部はゆるやかに丸みをもって、外下方へ下り、胴部で屈曲し、内下方に下る。底部外面は回転ヘラ削り、内面は回転ナデ調整。	微砂粒若干含む	淡赤茶色	不良	
5-21	須恵器 甕口縁部	復元口径 12.5 残存高 3.9	口頸部から外上方にのびる。口縁部は端部がやや鋭くなっている。口縁部外面は強い横ナデ。その他ナデ調整。	1㎜大の小砂粒と微砂粒若干含む	外面暗灰色 内面灰白色	良好	
5-22 18-D	須恵器 甕	胴部径 9.9 残存高 14.5	口頸部に弱い2本の凹線が巡り、外上方にのび、口縁との境に強い凹線が巡る。肩部は外下方に下り、胴部との境に深い凹線が巡る。胴部はほぼ球形を呈し、穿孔は上方から斜めに入れる。胴部から底部にかけて、回転ヘラ削りの上から、カキ目が施され、底部でうずをまいている。底部にヘラ記号がある。	1～3㎜の小砂粒と微砂粒多く含む	灰白色	良好	ヘラ記号 ×

図版番号	器種	法量 (cm)	形態・手法の特徴	胎土	色調	焼成	備考
5-23 18-E	須恵器 甕	胴部径 10.0 残存高 13.4	頸部はゆるやかに外上方にのび、口縁部に至る。肩部は外下方に下り、胴部との境に深い凹線が巡る。胴部はほぼ球形を呈し、穿孔は上方から斜めに入れる。底部は回転ヘラ削り、他はナデ調整。	密	白色、青色が点在	不良	
5-24 12-15 18-F	須恵器 甕	胴部径 9.1 残存高 10.6	口頸部は外上方にのび、残存部の上半に細い波状文を入れた後、文様帯の直下に1条の凹線が巡る。頸部と肩部との境に1条の凹線が巡り、肩部は外下方に下る。胴部には3条の沈線が巡り、その間の列点文の文様帯に上方から斜めに穿孔を入れる。内外面ともナデ調整。	1～2mm大の小砂粒を若干含む	灰白色	良好	
6-1	須恵器 壺	復元口径 13.8 残存高 4.8	口頸部は上方にたちあがり、口縁部は外上方にのびる。端部は外方に肥厚し、面を成す。肩部は外下方に下る。口縁部内外面は強いヨコナデ。肩部外面は平行タタキの上にカキ目がみられるがわかりにくい。肩部内面には、同心円タタキの上にナデを施してある。	1～2mmの小砂粒若干含む	灰白色	良好	
6-2	須恵器 甕	復元口径 18.2 残存高 4.1	口頸部は上方にたちあがり、口縁部はやや外反する。口縁端部は、外方に丸く肥厚する。内外面ともナデ調整。	1mm大の微砂粒若干含む	灰色	良好	
6-3 19-B	須恵器 壺	復元口径 12.0 胴部最大径 16.9 器高 16.5	口頸部は上方にたちあがり、口縁部は外反し、口縁端部は外方に丸く肥厚する。肩部は外下方に下り、胴部から底部にかけては、丸味をおびて、内下方に下る。外面は肩部から下は回転ヘラ削り、胴部から上はカキ目が施され、その上をナデで消してある。内面はナデ調整。	1mm以下の微砂粒若干含む	灰色	良好	
6-4	須恵器 壺	復元口径 12.1 胴部最大径 18.5 残存高 16.1	口頸部は上方にたちあがり、口縁部は外反する。端部は外方に肥厚し、面を成す。肩部は丸みをもって、外下方に下る。胴部は内下方に下る。外面は肩部にカキ目が施され、底部には回転ヘラ削りである。内面はナデ調整。	1mm以下の微砂粒若干含む	灰色	良好	

図版番号	器種	法量 (cm)	形態・手法の特徴	胎土	色調	焼成	備考
6-5 19-A	須恵器 壷	口径 14.0 胴部最大径 25.4 器高 24.9	口頸部、口縁部は外上方にのび、端部付近で、外方に肥厚する。肩部は外下方に下り、体部から底部にかけては、丸味をもって内下方に下る。口頸部外面にはヘラ描の文様帯がある。体部外面には、カキ目を施したのちに平行タタキを施し、その下にはカキ目の上に格子目に近い板目のタタキを施してある。内面は、同心円タタキである。	微砂粒を若干含む	灰色	良好	
6-6	須恵器 甕	復元口径 19.2 残存高 12.2	口頸部は外上方にのび、端部は外方に丸味をもって、肥厚する。端部直下に断面三角形の稜が巡る。肩部は内弯気味に外下方へ下る。口頸部外面にはヘラ描文様、体部外面にはカキ目の上から平行タタキを施す。体部内面には同心円タタキを施してある。	1㎜以下の微砂粒若干含む	灰色	良好	
6-7 13-18	須恵器 壷	底径 8.2 胴部最大径 15.6 残存高 10.5	口縁部は基部より欠損している。肩部はなだらかに外下方に下り、胴部から底部へは、内弯しながら内下方に下る。肩部から底部まで、外面はカキ目を施している。内面はナデ調整で、底部中央部は未調整。	微砂粒若干含む	灰色	良好	
6-8	土師器 短頸壷	復元口径 9.2 残存高 6.9	口縁部は上方にのび、端部は丸い。肩部は外下方に下り、胴部で下方に下る。内外面ともナデ調整。	微砂粒を多く含む	淡褐色	良好	
6-9	土師器 短頸壷	復元口径 14.0 残存高 6.5	口縁部は上方にのび、端部で内傾し丸い。肩部は外下方に下る。内外面ともナデ調整。	1～2㎜大の砂粒を多く含む	淡橙色	良好	
6-10	土師器 甕	復元口径 21.1 残存高 12.1	口縁部は外上方にのびた後、上方にのびる。端部はやや肥厚し、端部上面はくぼみ気味である。頸部はやや肥厚し、体部は外下方に下る。体部外面には、20本1単位の左下りのハケ目がある。体部内面には不定方向のハケ目がある。口縁部内外面は横ナデ調整。	一部に3㎜大の小石を含み、微砂粒を外く含む	淡橙色	良好	

土壙5出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	形態・手法の特徴	胎土	色調	焼成	備考
7-1	須恵器 坏蓋	復元口径 14.6 器高 4.2	天井部は丸く、比較的高い。天井部から口縁部に下りはじめたところに凹線が巡る。口縁部はやや外方へひらきぎみに下る。外面は回転ヘラ削りで中央は未調整。内面はナデ調整。	2㎜程度の砂粒若干含む	灰白色	良好	
7-2	須恵器 坏蓋	復元口径 16.0 残存高 4.3	天井部は平たく、天井部と口縁部の境に強い凹線が巡る。口縁部は下方へ下り端部は丸い。外面は回転ヘラ削りでの自然釉付着。内面は回転ナデ調整。	小石などを含む	灰色	良好	
7-3	須恵器 坏蓋	復元口径 14.9 残存高 4.9	天井部は高く、天井部と口縁の境目に凹線が巡る。口縁部は内弯気味に下方に下る。外面は回転ヘラ削り。内面は回転ナデ調整。	砂粒含む	灰白色	やや良	
7-4	須恵器 坏蓋	口径 14.2 器高 4.1	天井部からゆるやかに外下方に下り、口縁部は内弯気味に下方に下る。外面は回転ヘラ削り。自然釉付着。内面は回転ナデ調整。	密 白色微砂粒子若干含む	灰色	良好	
7-5	須恵器 坏蓋	復元口径 13.7 器高 4.3	天井部は高く丸い。天井部と口縁部の境目に凹線が巡る。口縁部は外下方に下り端部は丸い。天井部外面にヘラ記号あり。外面は回転ヘラ削り、内面は回転ナデ調整。	1㎜以下の白色微砂粒子を含む	灰色	良好	ヘラ記号 ／
7-6	須恵器 坏蓋	復元口径 15.2 残存高 4.8	天井部から曲線を描きながら口縁部に下りはじめたところに沈線が巡る。口縁部はわずかながら内傾して下る。内外面ともに回転ナデ調整する。	3㎜位の小石、微砂粒など若干含む	灰白色	良好	
7-7	須恵器 坏蓋	復元口径 14.6 残存高 3.3	天井部から外下方に下り、口縁部は内弯気味に下方に下る。端部は丸い。内外面ともに回転ナデ調整である。	5㎜大の小石を一部に含む	内面は灰白色 外面は暗灰色	良好	
7-8	須恵器 坏身	口径 13.0 器高 5.0 受部径 16.1	たちあがりはゆるく内傾しながら上方にのびる。受部は外方にやや上がりぎみである。底部外面中央は回転ヘラ削りで未調整。内面は回転ナデ調整。	2㎜大の小石を若干含む	灰白色 立ちあがり及び内面は白色	やや不良	

図版番号	器種	法量(cm)	形態・手法の特徴	胎土	色調	焼成	備考
7-9	須恵器 坏身	復元口径 13.1 復元受部径 15.0 残存高 4,7	たちあがりは内傾し中位から直立し、上3分の1より再び内傾する。端部は厚く丸い。受部は外方にのびる。たちあがりは強いナデ調整。	2㎜位の小石を若干含む	灰白色	普通	
7-10	須恵器 坏身	復元口径 13.0 復元受部径 15.4 残存高 4.0	たちあがりは内傾しながらのび、端部は丸くおさめる。受部はわずかに外上方にのび厚い。内外面ともナデ調整。	2㎜位の小石その他若干含む	灰白色	良好	
7-11	須恵器 坏身	復元口径 13.0 受部径 15.2 残存高 3.5	たちあがりは内傾した後上方へのびる。受部は短く外方にのび、端部は丸い。内外面は回転ナデ調整。底部外面は回転ヘラ削りである。	2㎜大の砂粒を含む	灰色	良好	
7-12	須恵器 坏身	口径 12.3 受部径 14.3 器高 4.4	たちあがりは内傾しながら鋭くのびる。受部は短く外方にのび、端部は丸い。底部での器壁は厚くなる。内外面は回転ナデ調整。底部外面は回転ヘラ削りである。	3㎜大の小石など若干含む	灰白色	良好	
7-13	須恵器 坏身	口径 11.3 受部径 13.1 器高 3.2	たちあがりはゆるやかに内傾しながらのび、端部は丸くおさめる。受部は短く外方にのび、丸くおさめる。底部外面は自然釉が付着しヘラ削りで未調整。内面は回転ナデ調整。	微砂粒を若干含む	灰色	良好	
7-14	須恵器 坏身	口径 11.0 受部径 13.2 器高 4.3	たちあがりは内傾しながらのびる。受部はやや外上方にのび端部は丸い。底部は中央でほぼ平らになる。内外面とも回転ナデ調整。底部外面はヘラ削りである。	微砂粒、3㎜大の小石を含む	灰色	やや良	
7-15	須恵器 坏身	復元口径 11.2 復元受部径 13,4 残存高 3.7	たちあがりは内傾しながらのびる。受部はやや外上方にのび、端部は丸い。外面には自然釉が付着している。内外面とも回転ナデ調整。底部外面はヘラ削りである。底部にはナデ調整もみられる。	1～2㎜大の小砂粒を若干含む	外面は灰白色 内面は灰色	普通	
7-16	須恵器 壺	復元口径 17.0 残存高 5.5	口頸部は外上方にたちあがり、口縁部は外反し端部は外方に丸く肥厚する。口縁部の内外面ともにナデ調整、肩部は外下方に下る。口頸部内面に自然釉が付着する。	2～3㎜位の小石を含む	外面は灰白色 内面は灰黒色	不良	

図版番号	器種	法量 (cm)	形態・手法の特徴	胎土	色調	焼成	備考
7-17	須恵器 甕	復元口径 11.8 残存高 4.9	口頸部は外上方にたちあがり、口縁部は外反し、端部は面を成す。口頸部と肩部との境の内面が少しとびでている。肩部外面は縦方向のカキ目をナデで消してある。肩部内面には同心円タタキを施している。内外面ともナデ調整。	微砂粒を含む	灰色	良好	
7-18	須恵器 壷	復元口径 15,4 残存高 8.0	口頸部は上方にたちあがり、口縁部はやや外反気味で、端部は面を成す。外面の口頸部と肩部の境に沈線が巡る。肩部は丸みをもって外下方に下る。肩部外面にはカキ目、内面には同心円タタキを施している。口縁部内外面ともナデ調整。	密	外面は灰茶色 内面は灰白色	良好	
7-19	須恵器 甕	復元口径 17.2 残存高 6.4	口頸部は外上方にたちあがり、口縁部はゆるやかに外反し端部は丸く肥厚する。肩部は外面に平行タタキの上からカキ目、内面に同心円タタキの上からナデで消してある。口縁部内外面ともナデ調整。	1㎜大の小砂粒を若干含む	灰白色	良好	
7-20	須恵器 甕	口径 24.6 残存高 12.2	口頸部は上方にたちあがり、口縁部は外反する。端部は外下方に肥厚して面を成し凹線が巡る。肩部は外下方に下る。肩部内面には同心円タタキがありナデで消してある。	小砂粒を若干含む	灰色 口縁内面と肩部外面は自然釉付着の為暗緑色	良好	
7-21	須恵器 甕	復元口径 18.0 残存高 3.7	口頸部は外反しながら上方にのび口縁部は外反する。いったん外へ折り曲げて再び口縁部に張りつけている。口縁内外面ともに回転ナデである。	微砂粒を若干含む	灰白色	良好	
7-22	須恵器 短脚高坏	脚裾径 8.8 残存高 6.5	坏底部は外上方にのびる。脚部は外下方に下り裾部で大きく外反する。裾上部に円孔を3方に穿つ。坏底部は回転ヘラ削りで、その他回転ナデ調整。	一部に5㎜大の砂粒を含む	灰白色	良好	
8-1	須恵器 提瓶	復元口径 7.8 胴部最大径 15.0 残存高 17.7	口頸部は外上方にたちあがり、口縁部は上方にのびる。肩・胴・底部は正面では球形。側面では、背面は平坦で、正面はふくらみ気味である。体部はカキ目調整。	1㎜以下の微砂粒を若干含む	灰色	良好	

図版番号	器種	法量 (cm)	形態・手法の特徴	胎土	色調	焼成	備考
8-2 12-14 17-E	須恵器 直口壷	残存高 11.25	口頸部は外上方にたちあがり、体部は肩がやや張っている。頸部には、二条の沈線がある。肩部にも、二等の沈線により、文様帯を作っている。その中には、櫛描列点文が施されている。	密	外面濃灰色 一部淡灰色 内面淡灰色	良好	外面一部自然釉がかかっている。
8-3 20-B	土師器 甑	復元口径 23,3 器高 31.55	口縁端部は僅かに外反し、丸くおさめる。体部中央に把手跡がある。底部には2つの大きな穴を穿っており、ヘラ削りを行っている。内外面とも、斜方向と縦方向のハケ目があり、口縁部内外面や体部外面の下半部はハケ目の上をナデで消している。	1㎜大の砂粒を多く含む	淡褐色	良好	
8-4	土師器 甕	復元口径 19.5 残存高 35.9	短く外反する口縁部と長手の体部からなる甕で、口縁部内外を横ナデ調整。口縁部内面に一部横方向のハケ目がある。 体部外面は縦方向のハケ目があり、頸部あたりでハケ目の上を一部ナデで消し、体部下半で一部ハケ目の上をヘラ削りしている。体部内面では、上半部に横方向のハケ目ののち、縦方向のハケ目を施し、下半部では、縦方向のハケ目ののち、細い斜方向のハケ目を施している。底部付近になると横方向のハケ目の上を一部ナデで消している。	0,5㎜以下の微砂粒を多く含む	淡赤橙色	良好	

井戸1出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	形態・手法の特徴	胎土	色調	焼成	備考
9-1 21-A	重圏文瓦	直径 13.5	内区には三重圏線を配する。瓦当と丸瓦の接合する面は、瓦当の裏面の上部で接合部が認められる。	1㎜程度の砂粒若干含む	外面 灰色 内面 灰白色	良好	
9-2	須恵器 坏蓋	復元口径 15.4 器高 3.3 つまみ径 3.1	天井部は低くて平たい。つまみは扁平で中央部が少しとびでている。口縁部は内弯気味に下方に下る。天井部外面は回転ナデ調整。内外面とも丁寧なナデ調整。	2〜3㎜大の微砂粒を若干含む	灰白色	良好	

図版番号	器種	法量 (cm)	形態・手法の特徴	胎土	色調	焼成	備考
9-3	須恵器 坏身	復元口径 13.7 残存高 3.3	口頸部は外上方にのび、口縁端部は丸くおさめる。底部は平底である。内外面ともナデ調整。	微砂粒を若干含む	灰白色	良好	
9-4	須恵器 坏身	口径 14.3 器高 3.5	口頸部に外上方にのび、口縁部はやや外反気味である。端部は丸くおさめる。底部は平底である。底部外面は回転ヘラ削り、他は回転ナデ調整。底部外面に粘土塊がついている。	3〜5㎜大の小石が多数混入している	黒灰色	良好	
9-5 21-B	灰釉陶器 長頸壷	胴部最大径 14.6 残存高 15.7 高台径 7.7	口頸部は上方にのび、残存部の半分より外反する。肩部は外下方に下り、胴部で丸く張り出す。胴部から底部にかけて、内下方に下る。高台は段になっていて、後から付けたものである。底部外面は回転ヘラ削り、口頸部から肩部にかけて、自然釉が付着している。	微砂粒を若干含む	灰緑色	良好	
9-6	鉄鎌	長さ 21.9 幅 5.2 厚さ 0.4	半月形をしている。先端部欠損、着柄部末端は若干欠損している。刃部は断面「Uの字」形になっている。		暗茶褐色		
9-7	須恵器 甕	復元口径 17.8 残存高 5.7	口頸部は短く外上方にのび、口縁端部は丸く肥厚する。肩部はゆるやかに外下方に下る。口頸部外面は横ナデ調整。体部外面は平行タタキの上に、カキ目を施し、体部内面は、横方向のハケ目の上に同心円タタキを施してある。	微砂粒を若干含む	灰白色	良好	
9-8 21-C	灰釉陶器 長頸壷	胴部最大径 22.4 残存高 28.1	口頸部はゆるやかに外上方にのびる。肩部は張り出し、内弯した後、内下方に下る。底部は高台より下に、丸くはみ出し、安定しにくい。胴部外面には焼成時に付着したとみられる粘土跡がある。内外面ともナデ調整。	微砂粒を若干含む	灰緑色	良好	

土壙墓出土遺物(1〜6)
蔵　骨　器、蓋(7、8) 観察表

図版番号	器　種	法　量 (cm)	形態・手法の特徴	胎　土	色　調	焼成	備　考
10-1	瓦　器 埦	口径　15.5 器高　5.8 高台径　5.4	体部は内弯して口縁部へつづき、口縁部は大きく外反して斜上方へのび、口縁端部内面に沈線が巡る。内面は密な暗文で、外面は横ナデのあと、やや間隔があくが口縁部から体部下半にまで比較的丁寧な暗文を施す。外面には指頭圧痕がある。底部に断面三角形から台形の低い高台が付く。底部内面には平行線状の暗文を施す。	密	漆黒色 淡灰色	良好	暗文の幅2㎜ 外面の暗文は3分割か 器高指数37.4
10-2	瓦　器 埦	口径　15.6 器高　5.5 高台径　6.7	体部は内弯して口縁部へつづき、口縁部はわずかに外反して斜上方へのび、口縁端部内面に沈線が巡る。内面は密な暗文で、外面は口縁端を横ナデし、暗文の間隔が若干あくが、口縁部から体部下半にまで施されている。体部外面には、指頭圧痕がある。底部に断面台形から三角形に近い低い高台が付く。底部内面には平行線状の暗文を施す。	密	淡灰色	普通	暗文の幅内外面とも 1.5㎜ 暗文は3分割 器高指数35.3
10-3	瓦　器 埦	口径(短径)15.5 (長径)16.5 器高　6.1 高台径　4.9	底部から内弯気味に体部がのび、口縁部はほぼまっすぐにおわっている。口縁端部内面にはごく浅い沈線が巡る。内面は密な暗文で、外面は比較的丁寧な暗文が口縁部から体部下半にまで施されている。暗文の間隔は若干あいている。底部に断面三角形の低い高台の先端を押えている高台が付く。底部内面には斜格子状の暗文を施す。底部外面にも暗文がある。	密	漆黒色	良好	暗文の幅 外面 2.5㎜ 内面 1.5㎜ 器高指数39.4 37.0
10-4	黒色土器 埦	口径　14.9 器高　5.6 高台径　6.4	底部から内弯気味に体部がのび、口縁部はほぼまっすぐにおわっている。口縁端部内面には沈線が巡る。内面は密な暗文で、外面は横ナデのち、比較的丁寧な暗文が口縁部から体部下半にまで施されている。暗文の間隔が若干あくものと密なものがある。体部外面には指頭圧痕がある。底部には断面台形の低い高台が付く。底部内面には連結輪状の暗文を施す。	密	漆黒色	良好	暗文の幅 1.5㎜ 外面の暗文は3分割 B類 器高指数37.6

図版番号	器種	法量 (cm)	形態・手法の特徴	胎土	色調	焼成	備考
10-5	土師器 小皿	復元口径 9.7 残存高 1.0	体部はゆるやかに外上方にのび、口縁端部は折返してある。底部は平底である。内外面とも横ナデ調整する。	微砂粒を多く含む	淡橙色	良好	
10-6	土師器 小皿	口径 9.1 器高 2.0	口縁部は内弯しつつ外上方にのび、端部は丸くおさめる。底部は丸底に近い。内外面とも横ナデで調整する。	微砂粒を多く含む	淡橙色	普通	
10-7	土師器 大皿	口径 15.6 器高 3.1	口縁部は内弯しつつ外上方にのび、端部は丸くおさめる。底部は平底に近い。内外面とも横ナデで調整する。	1～2㎜前後の砂粒を多く含む	淡乳桃色	普通	蔵骨器の蓋にしていた
10-8 22-C	須恵器 長頸壷	口径 19.5 器高 29.9	口頸部は外上方に開き、口縁部は横方向につまみあげる。肩部に二条の沈線がめぐり、その下に1条の突帯がついている。肩部から底部にかけて内下方に下がる。底部に糸切り痕があり、やや上げ底気味である。回転ナデで調整する。	2㎜内の砂粒を多く含む	内外面淡青灰色、暗青灰色も有り	良好	蔵骨器として転用された

包含層出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	形態・手法の特徴	胎土	色調	焼成	備考
11-1	弥生土器 鉢	復元口径 26.0 残存高 8.0	口縁端部は丸みをもって肥厚する。体部は内弯気味に下方に下る。底部はゆるやかに内下方に下る。体部には、縦方向の突帯がはりつけられている。内外面ともナデ調整。 河内系	微砂粒を多く含む	暗茶褐色	良好	D-15 第4層下層より出土
11-2 12-8	弥生土器 壷	口径 20.2 残存高 7.8	口頸部から口縁部にかけてゆるやかに外上方にのびる。口縁端部外面には、円形浮文と、竹管文が交互にはりつけられている。内外面ともナデ調整。	砂粒を多く含む	淡赤褐色	良好	G-12 第4層下層
11-3 23-D	弥生土器 長頸壷	胴部最大径 24.4 残存高 15.0	扁平な算盤玉形の器形をしている。外面はナデ調整か。内面は、下半部に不定方向のあらいハケ目を施してある。外面にスス付着。	1㎜以下の微砂粒を多く含む	淡黄褐色 一部黒変	良好	E-18 第4層

図版番号	器種	法量 (cm)	形態・手法の特徴	胎土	色調	焼成	備考
11-4 23-A	弥生土器 甕	口径 15.5 胴部最大径 16.4 器高 17.1 底径 4.0	口頸部は上方にたちあがり、口縁部は外上方にのび、端部は面を成す。体部は中ほどより上で張り出し、内下方へ下り、底部は突出して、平底である。体部外面には平行タタキがあり、上半はほぼ横方向で、下半は左下りである。口縁部内外面は強い横ナデで、他はナデ調整。底部内面にはヘラ跡あり。	1㎜大の微砂粒を多く含む	赤褐色	良好	G-12 第4層上面
11-5	土師器 小型甕	復元口径 15.2 胴部最大径 15.3 残存高 10.3	口縁部は外上方にのび、弱い凹線が巡る。口縁端部は面を成す。体部は外下方に下り、中ほどより下で張り出し、底部にかけては、丸みをもって、内下方に下る。口縁部内面には横方向のハケ目があり、体部外面には不定方向のハケ目がある。	微砂粒を多く含む	淡橙色	普通	F-14 第4層
11-6 20-C	土師器 甕	口径 14.8 胴部最大径 15.4 器高 14.2	口縁部は内弯気味に外上方にのびる。端部は内外面に沈線が巡り、丸くおさめる。体部は中ほどで張り出し、底部にかけて球形をしている。口縁部外面は縦方向のハケ目の上からナデで消してある。口縁部内面は、横方向のハケ目を施してある。体部外面の上半は縦方向のあらいハケ目を施してある。底部内面にもハケ目がみられる。外面にスス付着。	微砂粒を若干含む	淡橙色	良好	G-5 第3層上層
11-7	須恵器 (脚付) 長頸壺	頸部径 4.7 胴部最大径 15.8 残存高 19.5	口縁部は外上方にのび、端部は欠損している。頸部は内傾しながら上方にのび、中ほどより外上方にのびる。そこに弱い2本の凹線が巡る。肩部はゆるやかに外下方に下り、胴部との境に強い凹線が2本巡り、その間にヘラによる斜めの刺突文がある。底部には脚がついていた跡がある。底部外面は回転ヘラ削り。肩部から上に釉が付着している。	微砂粒を若干含む	灰色	良好	E-5 第3層上層
11-8	須恵器 瓶	復元口径 11.8 残存高 5.7	口頸部は外上方にのび、口縁部との境で外反し、突帯を巡らす。口縁部は外上方にのび、端部は丸い。外面に波状文、刺突文の文様が施されている。	微砂粒を若干含む	暗灰色	良好	D-7 第3層下層

図版番号	器種	法量 (cm)	形態・手法の特徴	胎土	色調	焼成	備考
11-9	須恵器 瓶	胴部径 9.5 残存高 6.3	肩部は外下方に下り、胴部との境目に2本の凹線が巡る。胴部から底部にかけて、内下方に下り、底部は平たい。胴部の穿孔は上方から斜めに入れる。底部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	微砂粒を若干含む	灰色	良好	F-4 第3層上層
11-10	須恵器 坏蓋	復元口径 16.8 器高 8.3 つまみ径 3.6	天井部は低くて平たい。つまみは扁平で中央部で少しとびでている。口縁部は内弯気味に下方に下る。端部は丸くおさめる。天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	微砂粒を若干含む	灰白色	良好	C-12 第3層
11-11	須恵器 坏身	口径 14.9 器高 3.9 高台径 9.9	体部は外上方にのび、口縁部につづく。端部はやや丸い。底部に断面台形の高台がついている。内外面ともナデ調整。底部外面は未調整。	1㎜大の微砂粒を若干含む	灰白色	良好	F-8 第4層上層
11-12	白磁碗	高台径 6.9 残存高 3.5	体部は内弯気味に外上方にのびる。内面の底部との境目に沈線状の段をいれる。分厚く低い高台を削り出す。外面は底部上部まで施釉。	1㎜以下の微砂粒を若干含む	釉は淡灰緑色 底部外面は白色	良好	F-10 第3層上層
11-13	管状土錘	残存長 11.8 直径 4.2 穿孔径 1.1	一端が欠損している。手づくねにより整形してある。	0.5㎜大の微砂粒を多く含む	乳赤褐色	良好	D-9 第4層下層
11-14	管状土錘	残存長 9.7 直径 4.4 穿孔径 1.6	一端が欠損している。器面にヘラ削りを施し、面取りしてある。	0.5㎜大の微砂粒を多く含む	淡褐色	良好	E-4 第3層上層
11-15	管状土錘	全長 6.5 直径 3.9 穿孔径 1.7	完形の小型土錘である。手づくねにより、整形してある。	1㎜大の微砂粒を多く含む	乳白色	良好	E-4 第3層上層
11-16	紡錘車	直径 3.8 残存高 1.5 孔径 0.5	一部が欠損している。円錘形を呈する滑石製の紡錘車である。上部に鋸歯文が5単位以上施され、下部に波状文が施されている。		黒灰色		F-3 第4層上面
11-17	紡錘車	直径 3.4 器高 1.8 孔径 0.8	半分欠損している。円錘形を呈する滑石製の紡錘車である。		黒灰色		E-10 第3層上層

図版番号	器種	法量 (cm)	形態・手法の特徴	胎土	色調	焼成	備考
11-18	紡錘車	直径 3.5 器高 1.4 孔径 0.8	載頭円錘形を呈する。滑石製の紡錘車である。中程に稜らしきものを有する。底面には中心部の円孔に向けて、線刻による鋸歯文が施されている。		黒灰色		E-6 第3層上層
11-19	砥石	残存長 3.7 直径 2.9	砂岩を使用している。両端が欠損している。器面全面に砥面部が認められる。		灰褐色		F-5 第3層上層

(山本・細川・萩野)

5　ま　と　め

弥生時代・古墳時代

上津島南遺跡は猪名川左岸にある標高2.5 *m*前後の微高地内遺跡である。

今回の調査の結果、古い時代の遺物として弥生土器をみることができる。土器の出土地点は調査区域内でもまばらではあったが、D－9地区とG－12地区に多少の集積がみられた。

土器の器種と型式をみると、壷では、口縁端部に竹管文や、竹管文と円形浮文を交互に施したもの、頸部は欠損していたが算盤玉形の胴部をした長頸壷、胴部に幅広い叩き目をもつ甕の①完形品数点等があった。これらはすべて第Ⅴ様式にあたるものであって、第四層中からの出土であることからみて古い遺構は、弥生時代後期からとするのが妥当ではないかと思われる。

古墳時代になると須恵器と土師器が中心となっている。

須恵器の蓋坏をみれば、蓋の中には天井部を平らにつくり器高の⅔が稜線以下の口縁部で占めているものであった。これは陶邑編年でいうTK 103号窯出土のⅠ型式、第3段階のものに似てはいたが、実物はややゆがみをみせ変形しているので確実なことはいえない。そこで須恵器のうち②瓶と提瓶から、その年代を推定してみることにした。

瓶ではラッパ状に外反する比較的長い口頸部をもち、体部を球形につくり、穿孔を外部から内側へ下向けにあけている。文様帯はつけているものといないものの両方が出土している。

提瓶ではその口頸部を外反させながら上方にたちあがらせており、扁平な円球形の体部をもっている。それにここでの提瓶は把手が退化してわずかにカギ状となった突起を両肩につけているものであった。こうした須恵器の型式は陶邑編年でいうⅡ型式の第4段階にあたり、豊中市桜井谷窯跡群中の編年ではⅡの3型式に入れられるので、③6世紀中頃以降に比定されるものである。

この遺跡では、弥生時代から古墳時代に移行する時期の土器として問題点の多い庄内・布留両様式のものの出土はほとんどみられなかった。そのことからすれば、ここは弥生時代の後期にはじまり、一時期をおいて古墳時代の中期半ば以降、即ち6世紀半ば以降を中心とした集落が形成されたと考えられる。またここから出土する須恵器は、おそらく豊中市・吹田市・箕面市などを中心に広がる千里窯跡群中で焼成されだものであろう。そのことは出土する蓋坏の中に、窯跡でみうけられる変形のものや、焼成不良の色調の悪いものなど若干含まれていることから近隣の窯での製作を考慮に入れたものである。

奈良時代・平安時代

両時代の遺構・遺物の出土は、先の時期よりはるかにその種類も量も増加してくる。それら

の中から主なものを列挙し、この時期内の遺跡の性格像を想定しておきたい。

奈良時代の重要な遺構・遺物としては、3層下部から掘り込まれていた枠組み井戸である。枠として重ねられた板は、長さ85cm、幅14cm、厚さ4cmの切り板を方形に14段にも重ねたものである。そして、井戸内の埋土遺物としては器高28cmの灰釉陶器の長頸壷、それに直径13.6cm、厚み3.5cmを計測する小型重圏文瓦等が底面より取り上げられた。これらが何故投入されていたのかは明らかでないが、それらによって井戸の終焉時期を判定するには充分役立つものであった。

重圏文瓦片はこの他、調査区域内から5片も検出されている。このうちの一つは、大型のもので、直径18cm、厚み4.5cm、円内に3mmの圏線を1.5cmの間隔で三重にめぐらしている。

さらにこの瓦とよく共伴する重弧文軒平瓦の小片も2枚出土している。それらは、聖武天皇難波宮④、平城京などの宮廷関係建物の屋根瓦として用いられている瓦の意匠として著名である。これに加えて直径20cm以上もの柱根の遺存を勘案すれば、当時、ここには政府と何等かのかかわりをもった建造物の存在を想像させる。

平安時代にかかわるものになると、まず棺内に僅かではあるが、遺骸片を残す木棺一基と、B類の黒色土器、口縁端部に沈線をもつ楠葉型瓦器椀、土師器等を埋納したとみられる土壙墓⑤一基、さらに桜の皮を止め具として用いた曲物を二段重ねとして井戸としたものなどが挙げられよう。ただし木棺埋置の年代については一考の余地を残している。またどのような目的で置かれたのかは不明であるが、100枚以上もの土師器皿、大小を5.6枚ずつ重ねた土器群1箇所、皿類の重なりはないが2.3mの範囲で広がりをみせる土器群3箇所などが目につく。

それに金属類としては役人のバンドの飾り具（銙帯）1箇、その他、I—12地区、即ち調査地区の北側で、おおむね東西に延びる大溝と南北に向う溝との切りあった箇所で、958年鋳造の皇朝十二銭のうち最後の銅銭、乾元大宝8枚の出土などは注意すべき遺物である。なお、土器類のなかには先述の土師器土器群近くの第3層下部から掘られた地層内に単独に埋置されていた蔵骨器と思われる須恵器の長頸壷も検出された。

遺構としては30条余りもある浅い小溝と、120箇所に及ぶ柱穴を含む窪みなどがみられた。

氏族としては遺跡近くにあって勢力を伸していたと考えられる豪族に津島朝臣、津島直の姓をもつ人物が記録されている。⑥

以上の事実を総括すれば、重圏文瓦片、役人のバンド金具、皇朝十二銭、など中央政府との関係を示唆しているようにもうけとれる。となれば、奈良朝以後、中央政府と関連をもつ館の存在したことの仮定はできないであろうか。

昭和60年度に行なう第二次調査の結果をまって、より詳細な観察をすすめれば、正確な遺跡

の性格も把握できるものと考えている。

（亥野）

〔註〕

① 尼崎市教育員会　『田能遺跡発掘調査報告書』　昭和58年

② 中村浩　『陶邑Ⅲ』　大阪府文化財調査報告書第30輯　大阪府教育委員会　昭和53年

③ 少路窯跡調査団　『桜井谷窯跡群２―17窯跡』　昭和57年

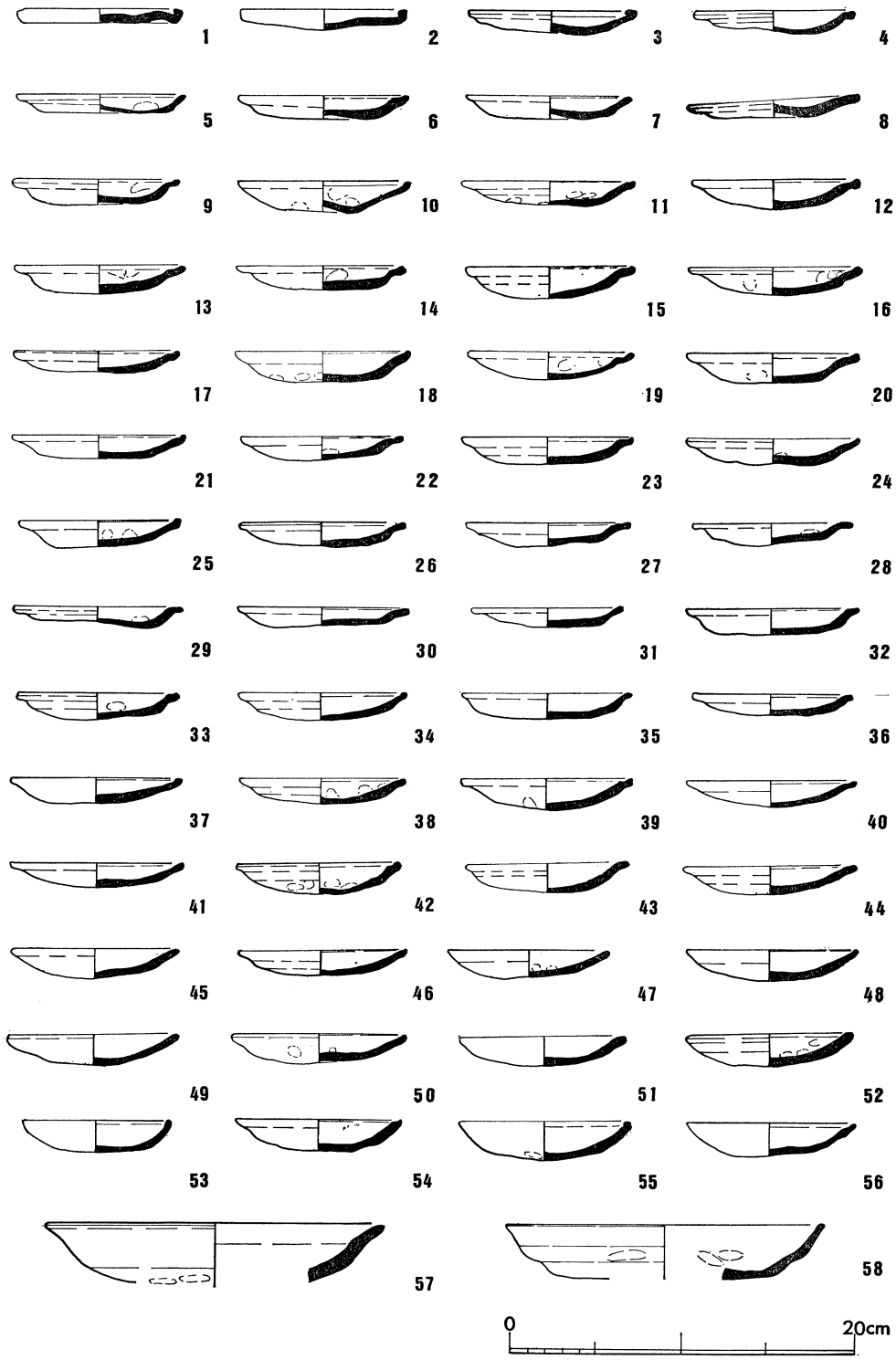
④ 山根徳太郎著　『難波宮』　学生社　昭和40年

⑤ 瓦器埦の地域色と分布　「摂河泉文化資料第19・20号」　摂河泉文庫　昭和55年

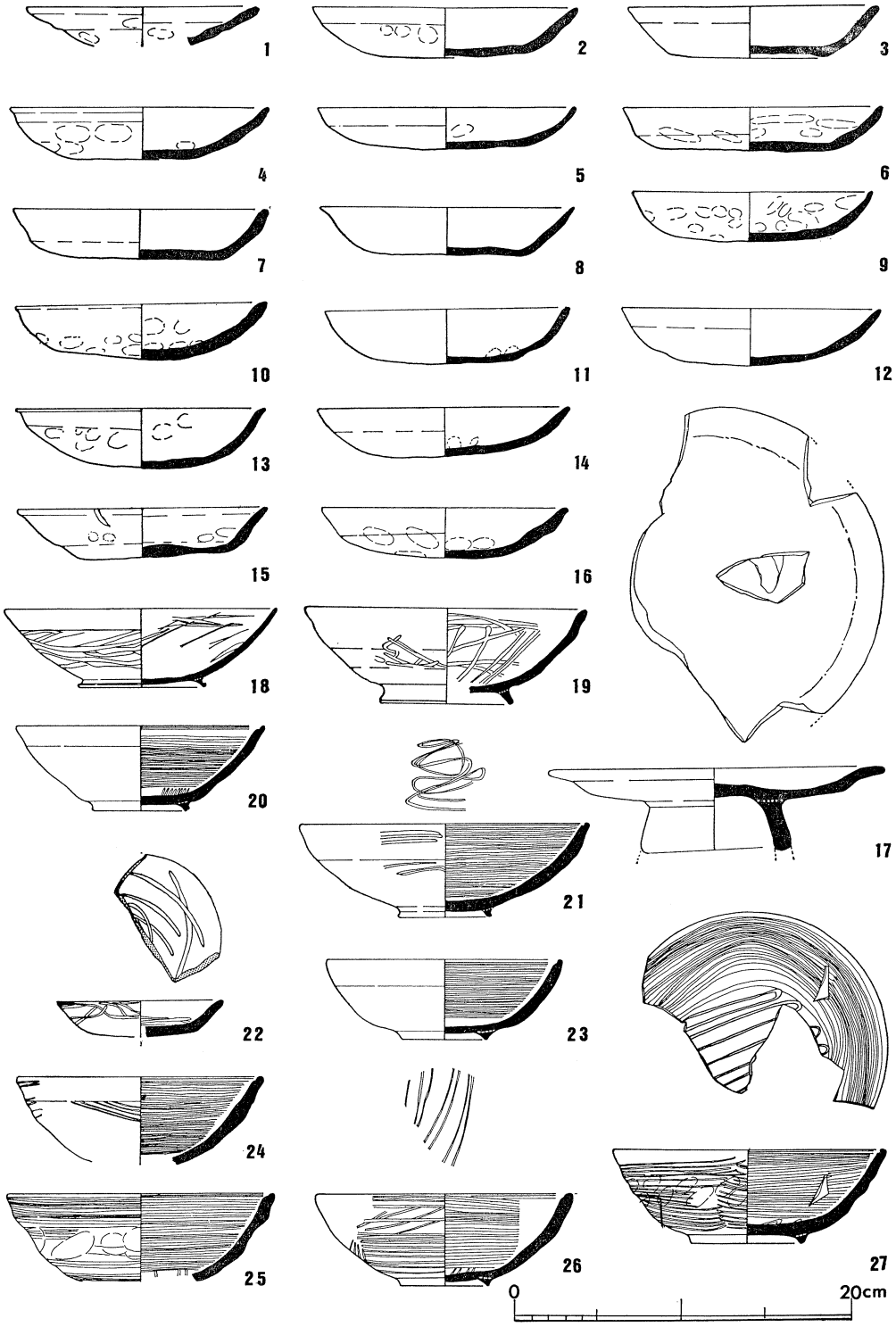
⑥ 豊中市史編纂委員会　『豊中市第１巻』　昭和36年

図

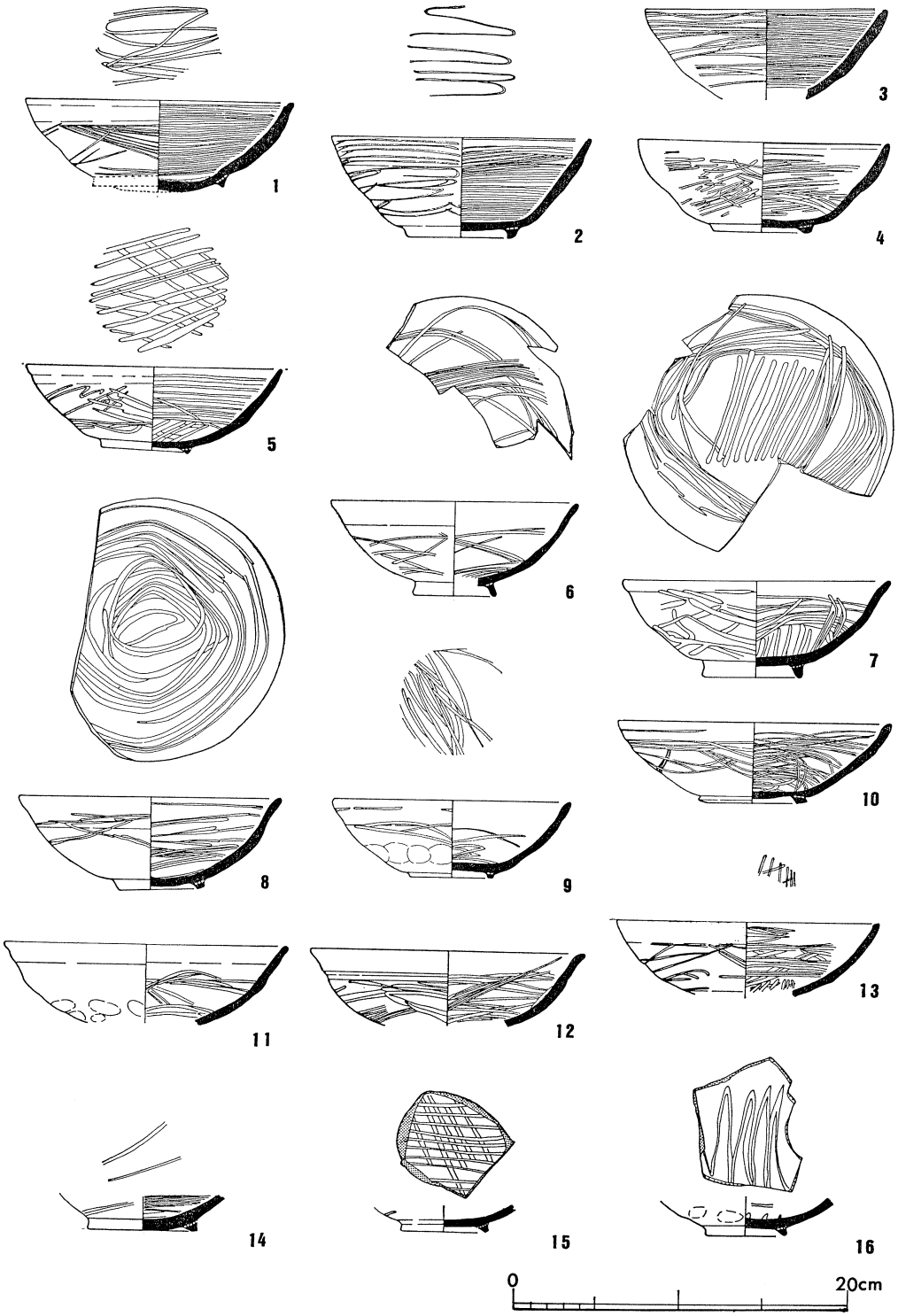
版



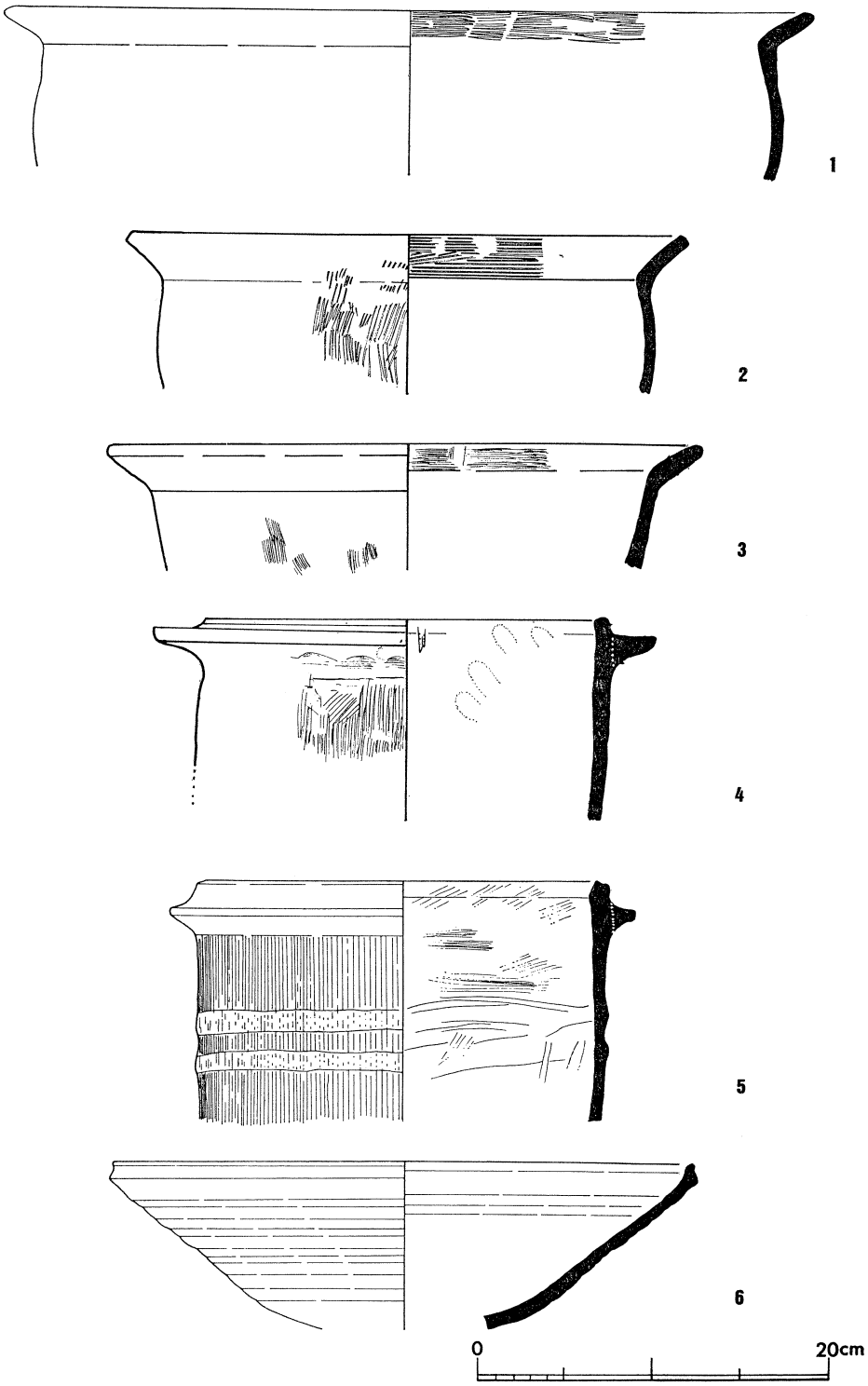
土器集積群1　出土遺物実測図



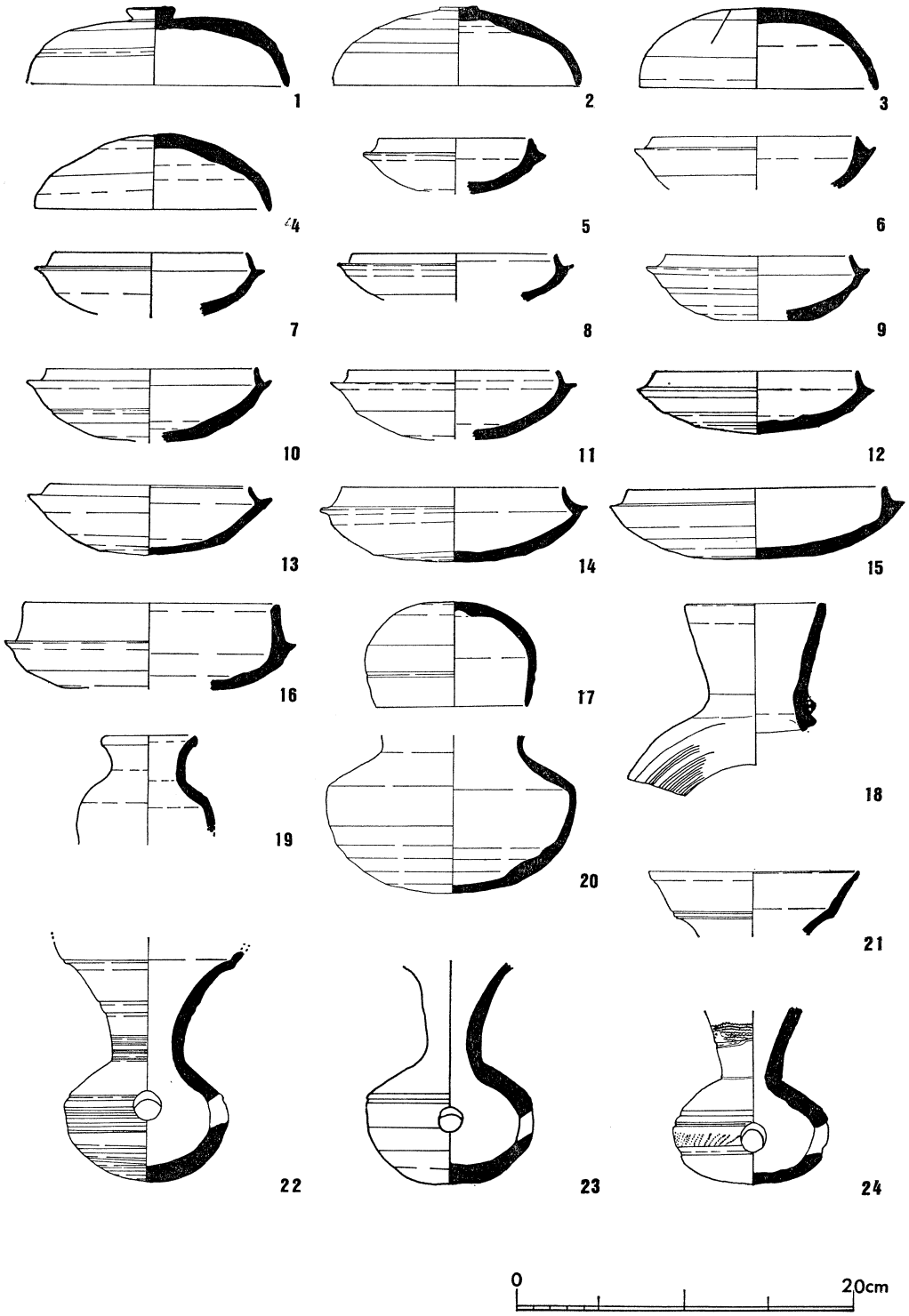
土器集積群1　出土遺物実測図



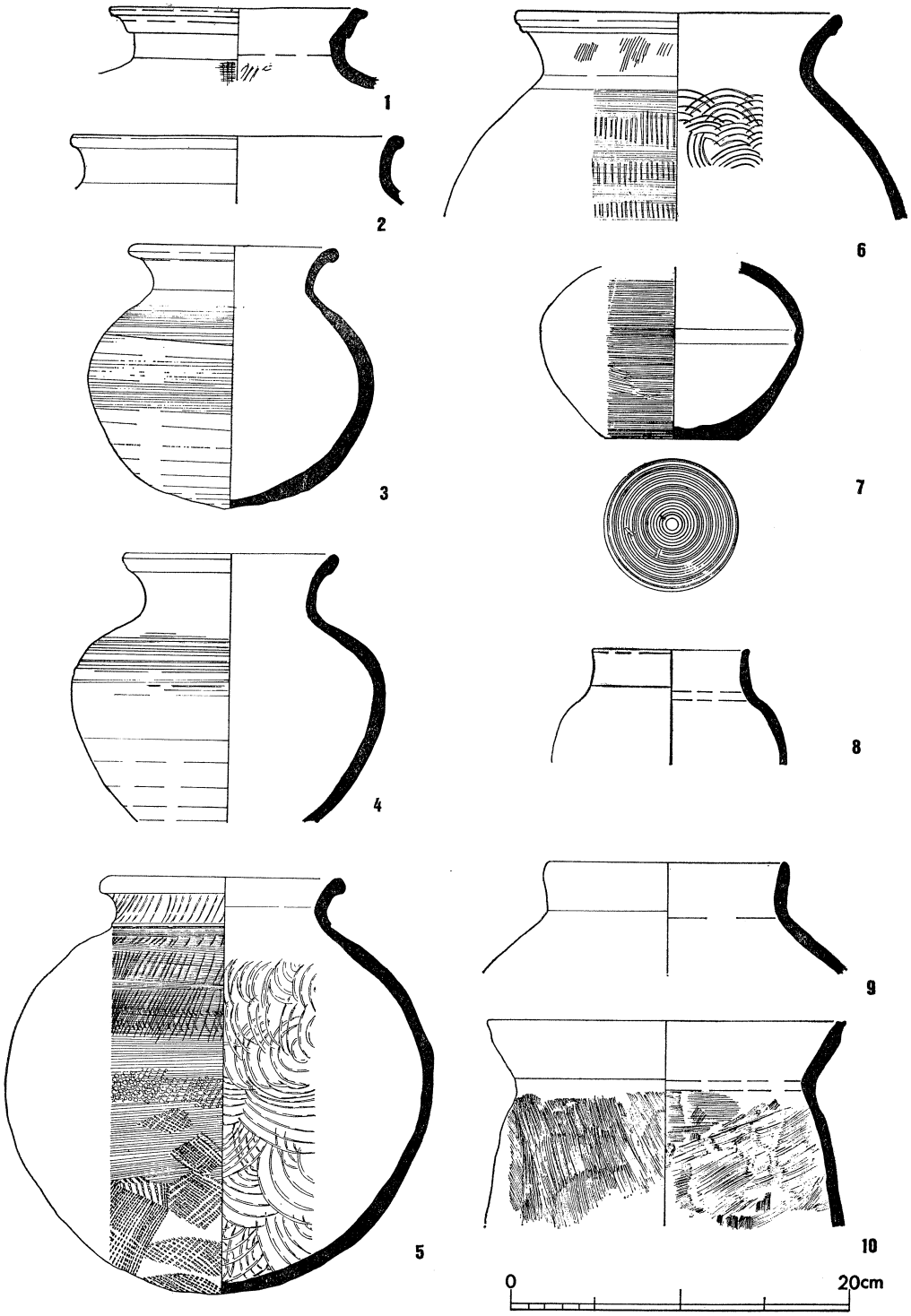
土器集積群1　出土遺物実測図



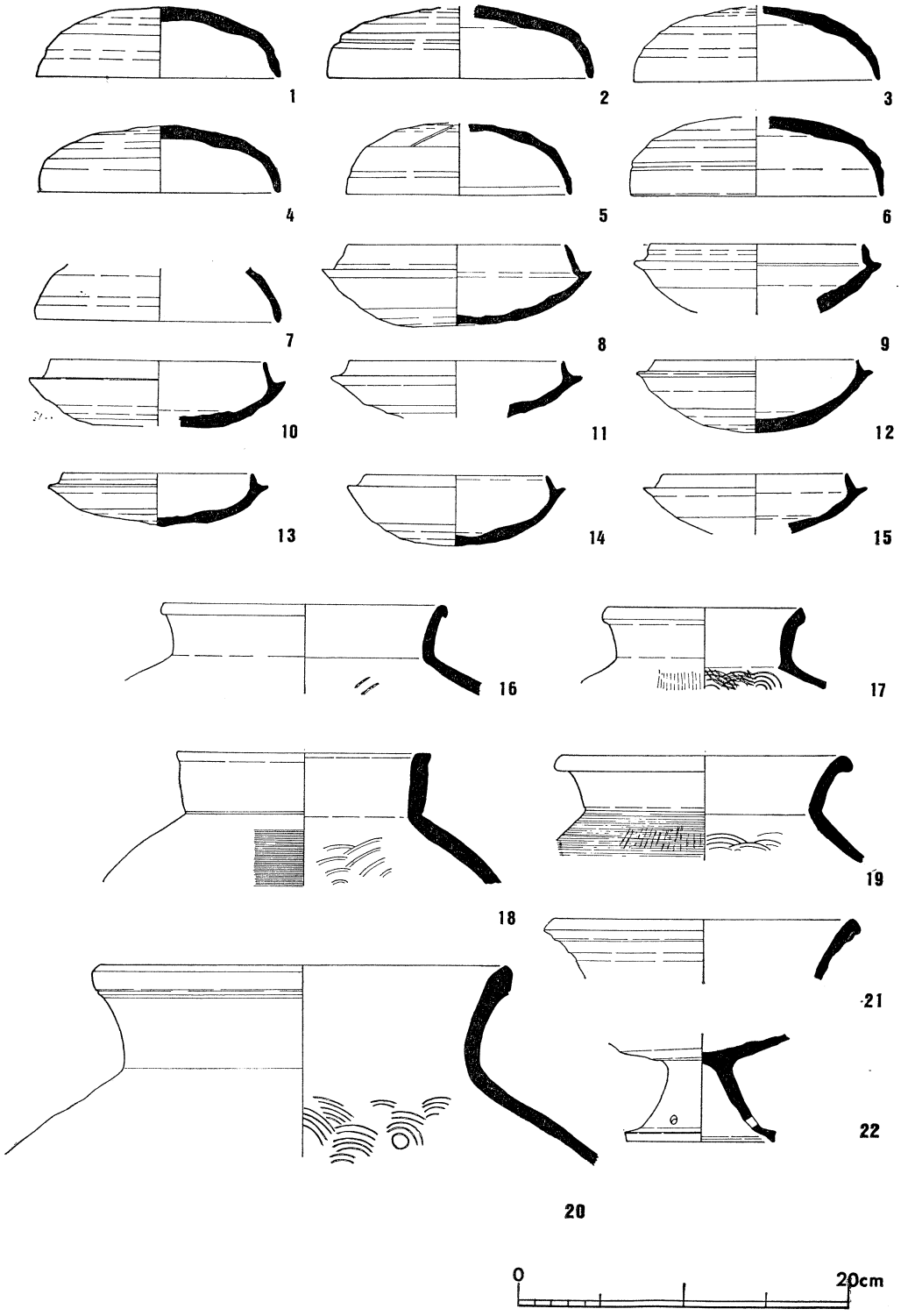
土器集積群1　出土遺物実測図



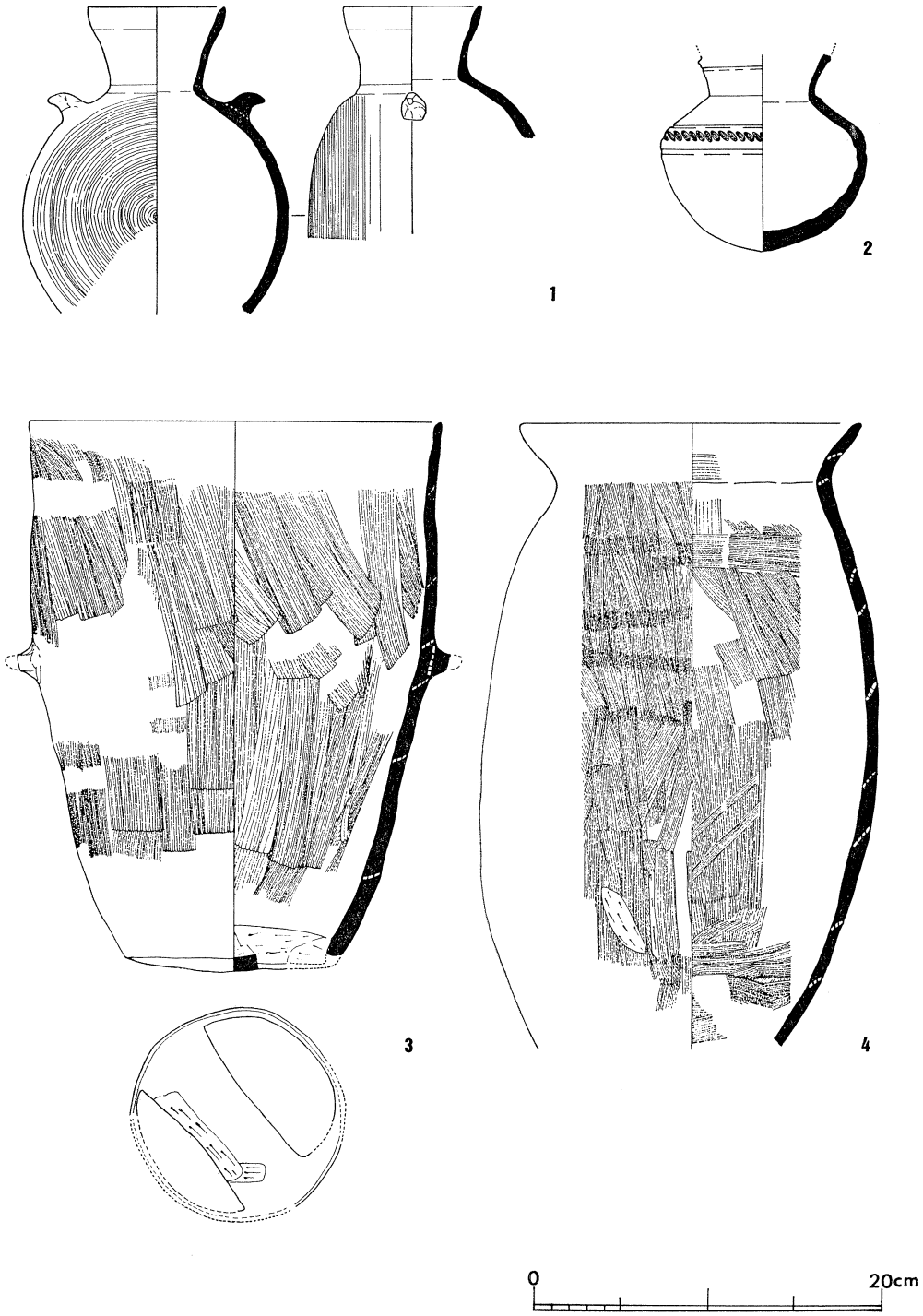
円形土壙3　出土遺物実測図



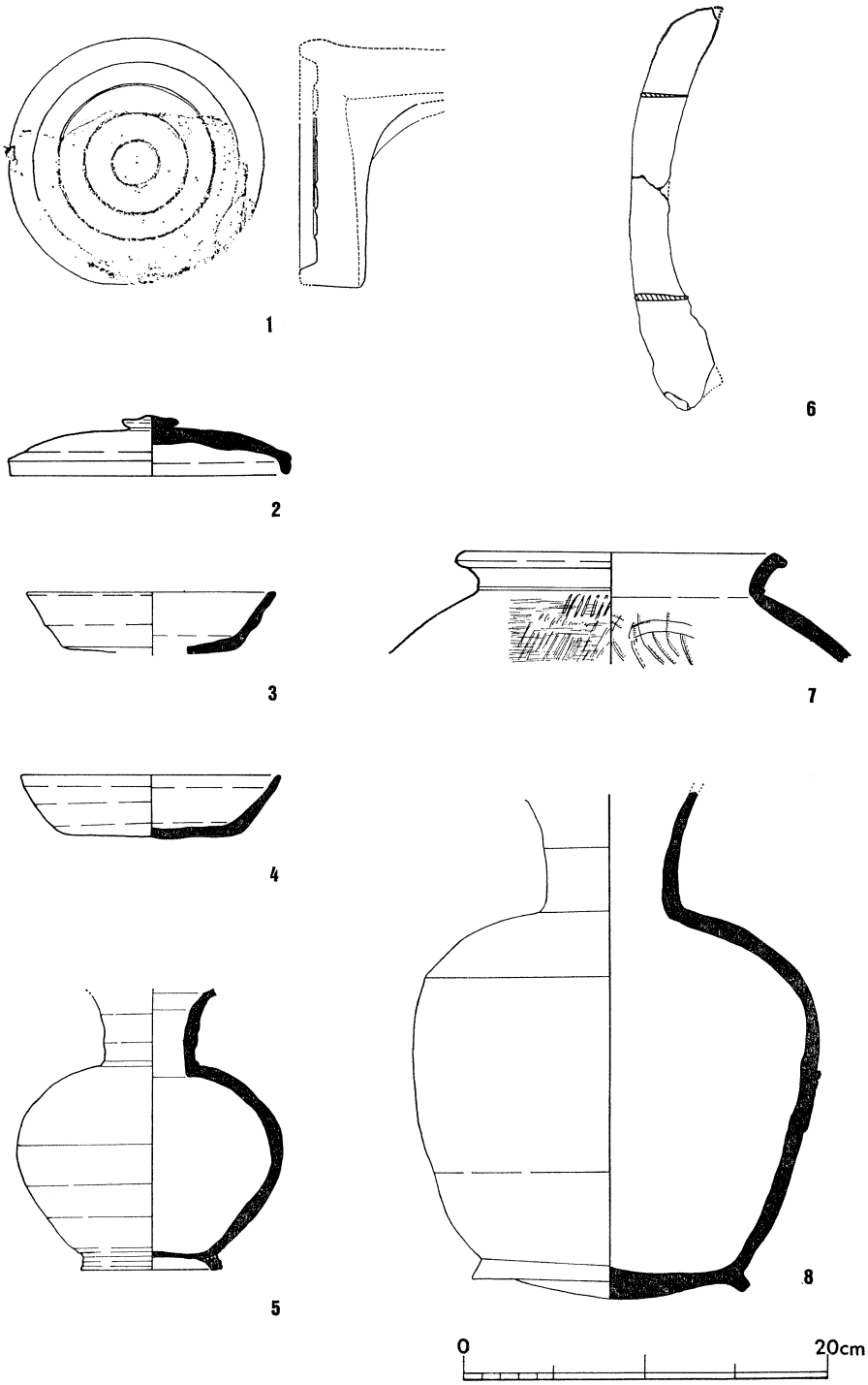
円形土壙3　出土遺物実測図



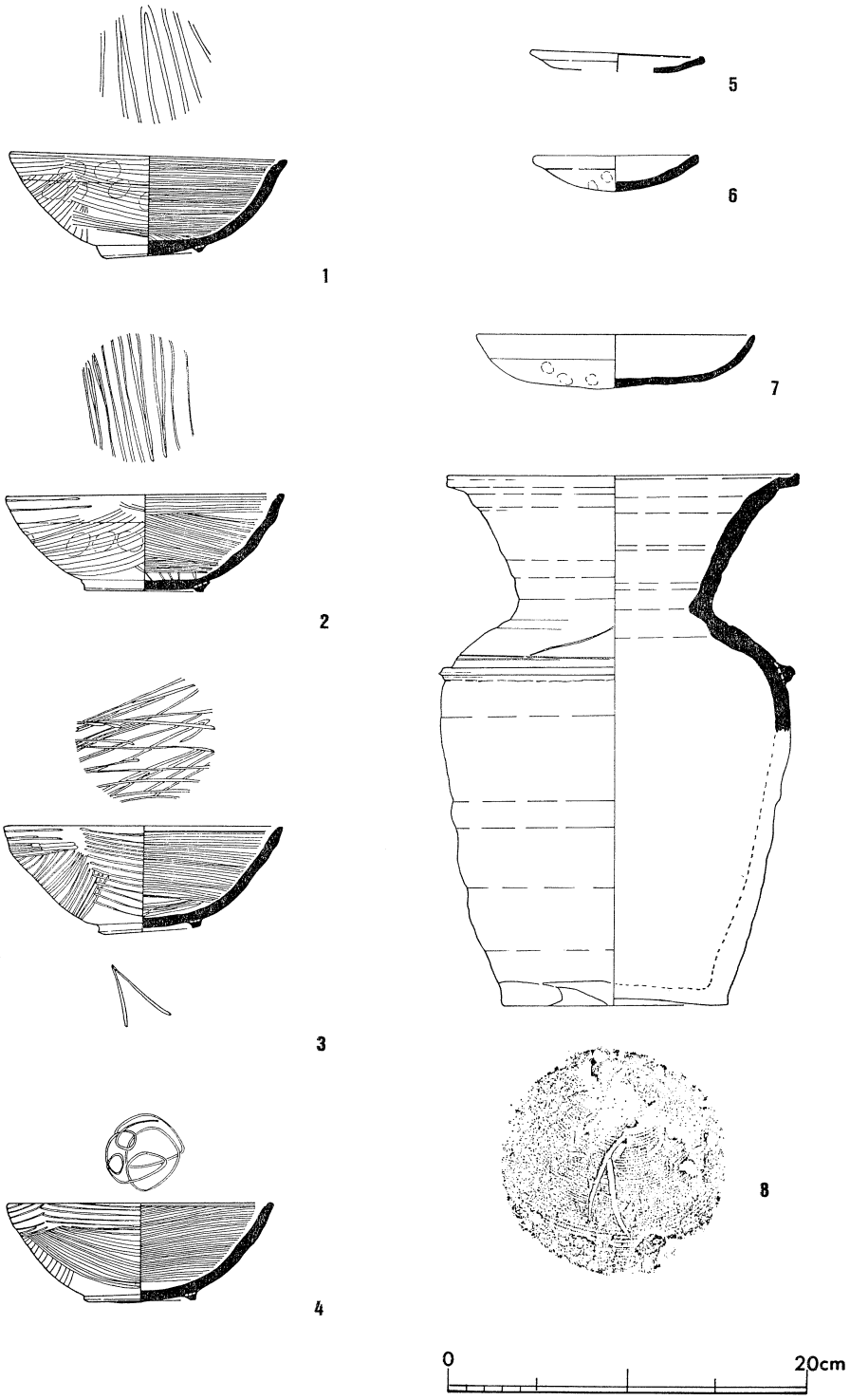
土壙5　出土遺物実測図



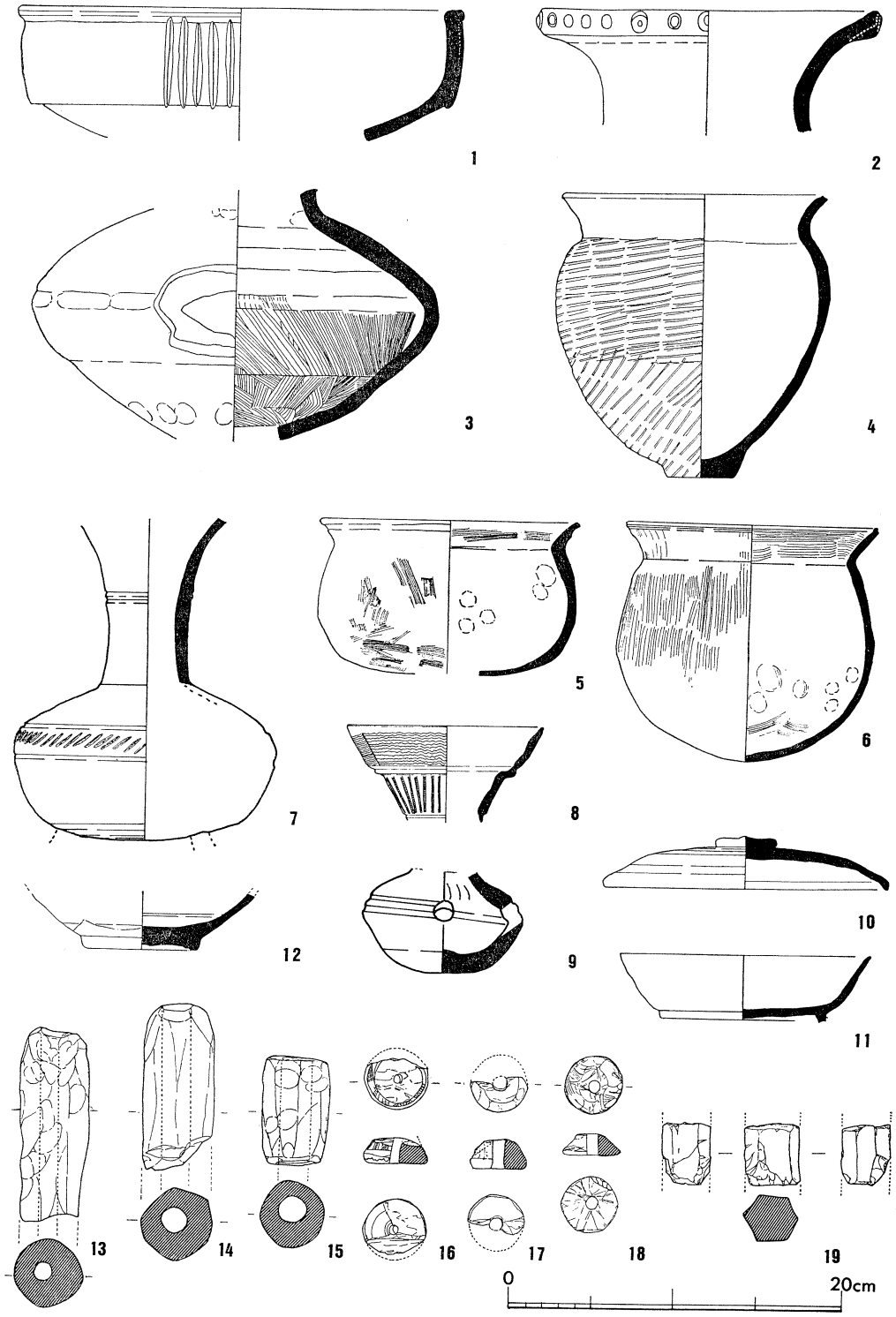
土壙5　出土遺物実測図



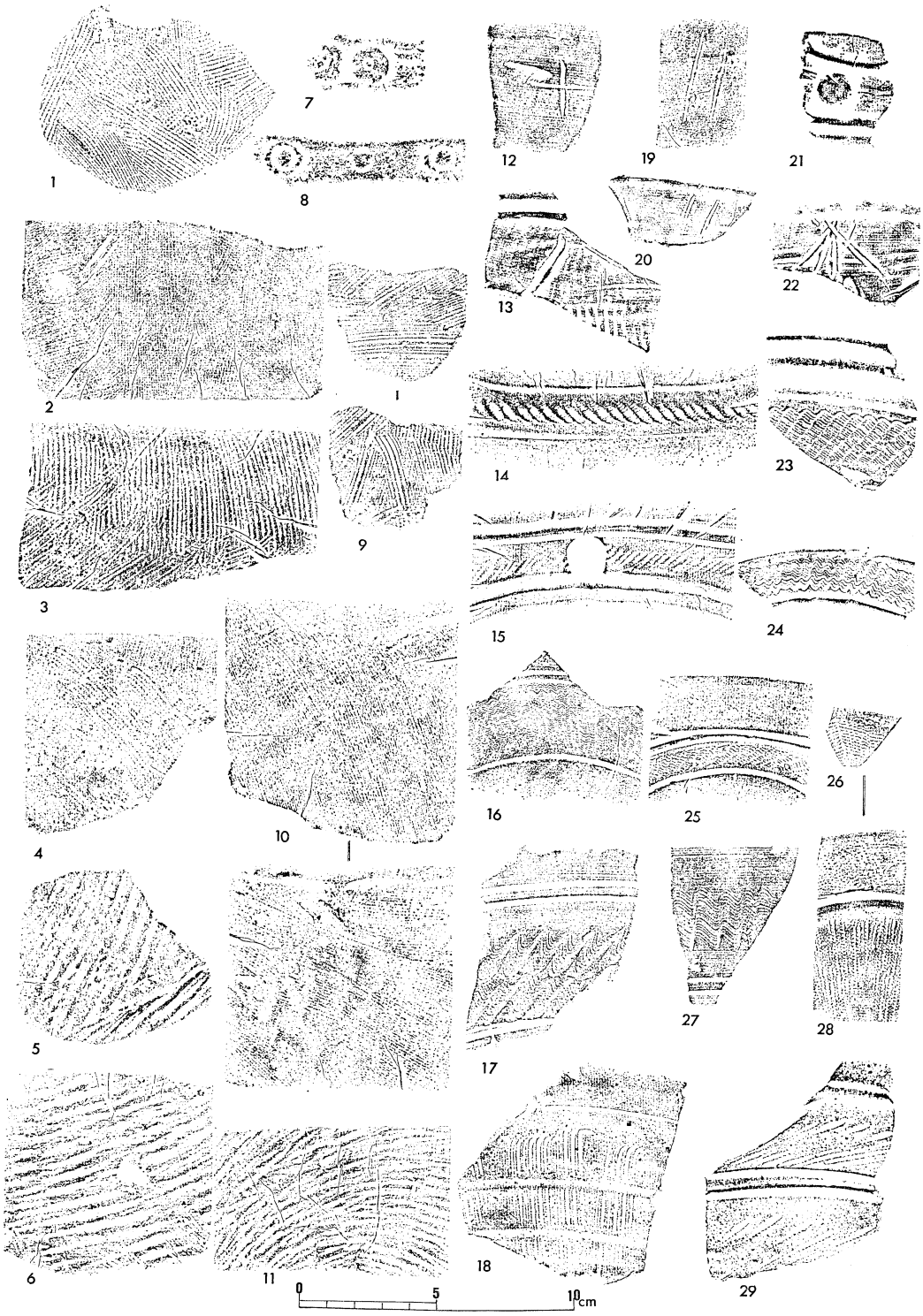
井　戸　1　出土遺物実測図



土壙墓出土遺物実測図（1～6）　蔵骨器・蓋実測図（7・8）

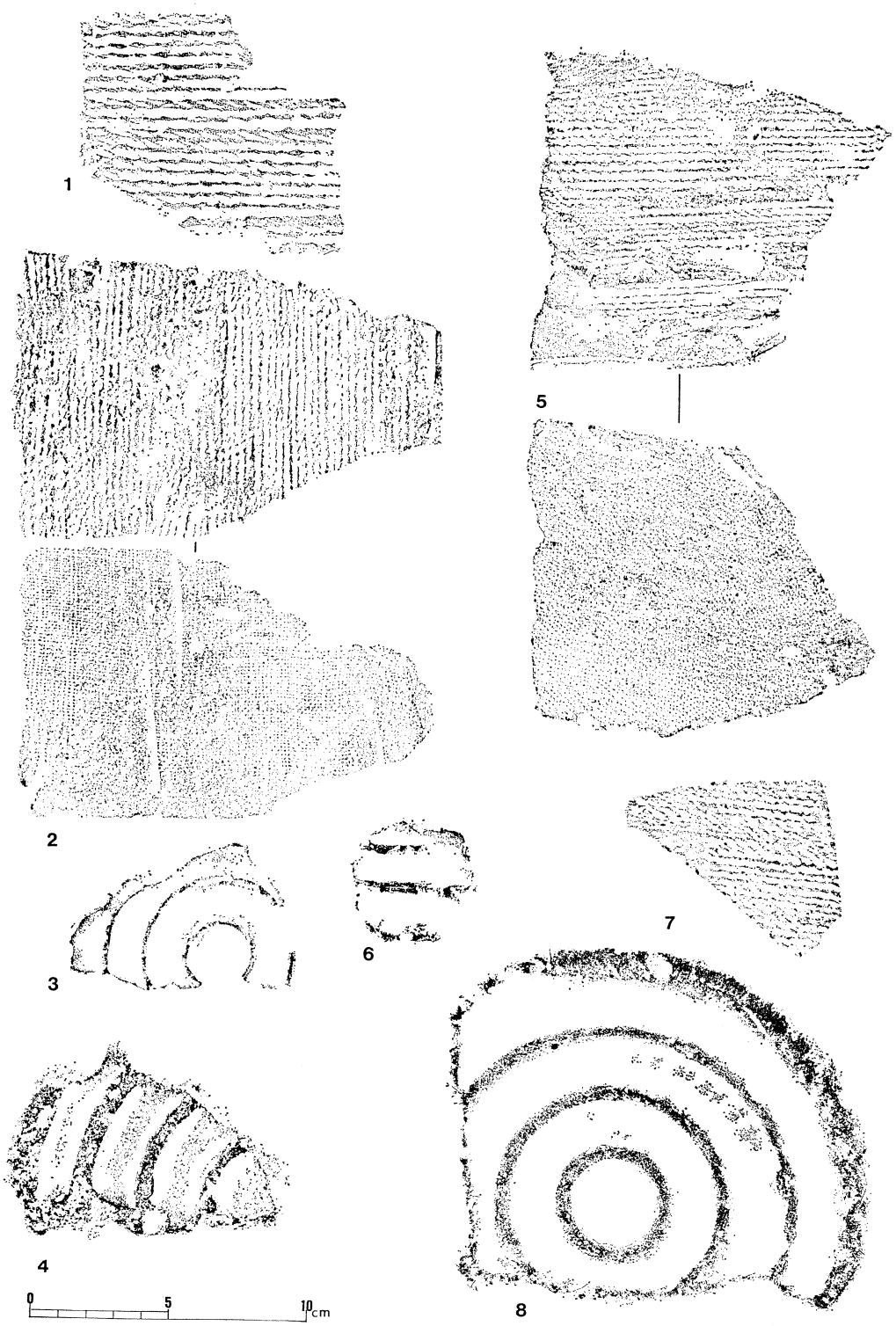


包　含　層　出土遺物実測図



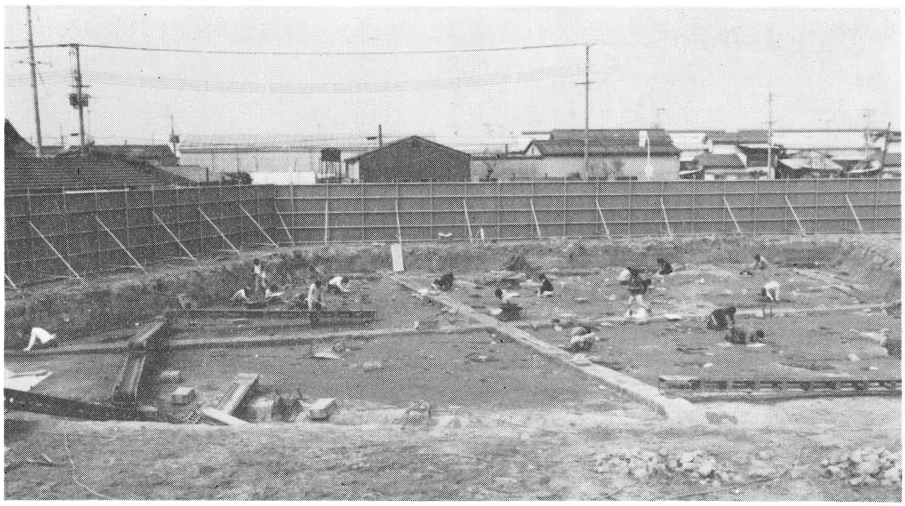
各種土器文様拓影　　12．13．19．20．22はヘラ記号

須恵器文様拓影



平瓦・軒丸瓦拓影（布目文・重弧文・重圏文）

図版15　発掘作業と遺跡



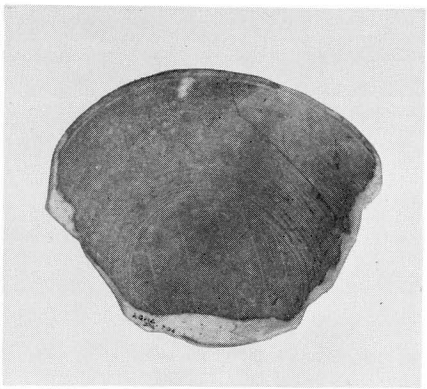
発掘作業風景

遺跡北側遺構

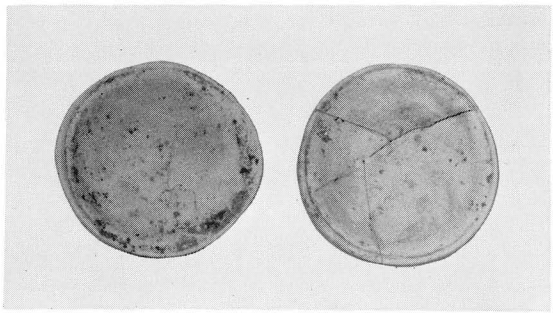
土師器皿出土状況

重ねられていた土師器皿

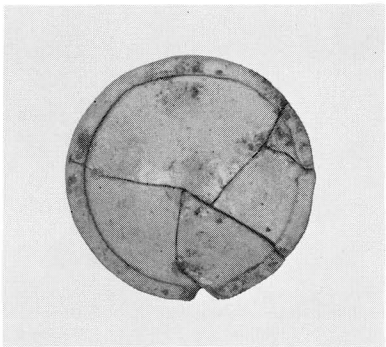
図版17 出土土器



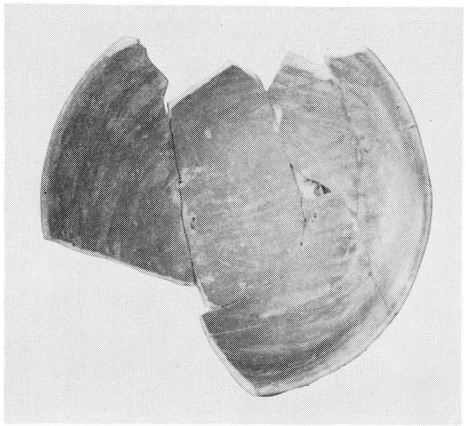
A



C



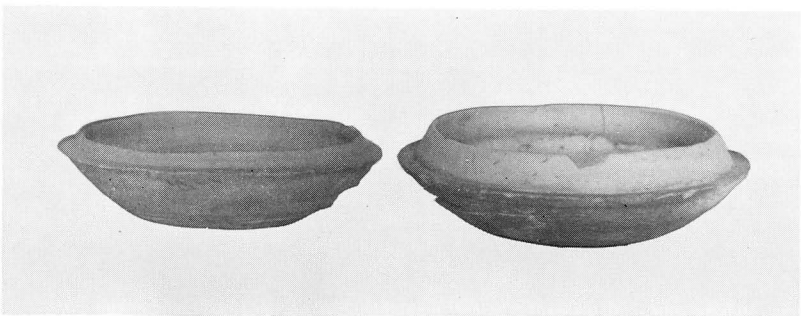
D



B

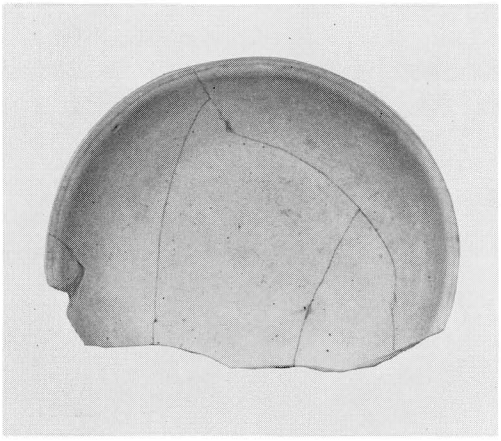
A・B　瓦器埦片
C・D　土師質小皿
E・F　須恵器
　　直口壺と坏身

E

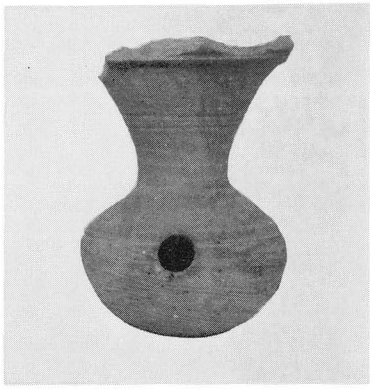


F

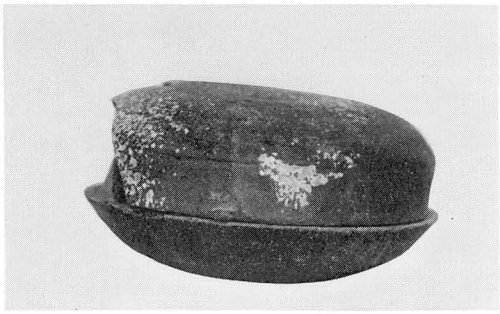
図版18 出土土器



A　土師器皿

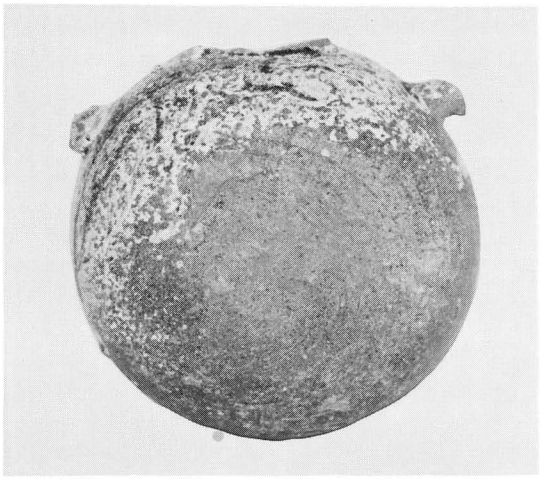


D



B　須恵器蓋坏

E



C　須恵器提瓶

F　D・E・F　須恵器瓲

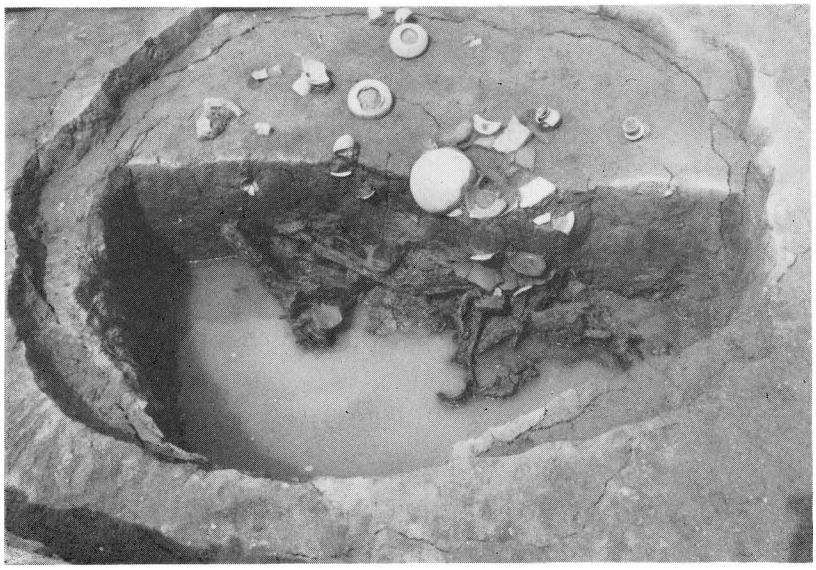
A

B

C

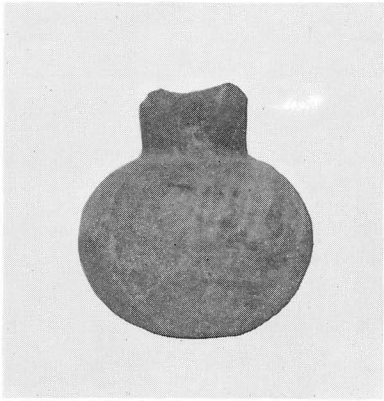
A・B　壺

C　埋甕



須恵器群出土状況（円形土壙）

A　土師器壺出土状況

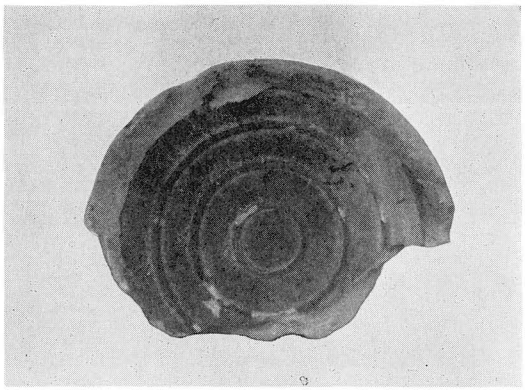


A′　土師器壺

B　土師器甑

C　土師器甕

A　重圏文軒丸瓦

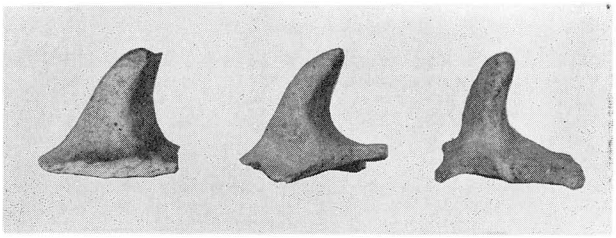


B　灰釉陶器

C　灰釉陶器

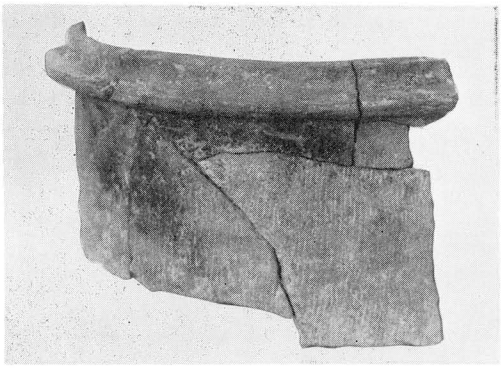
井戸1　出土の重圏文瓦と灰釉陶器

図版22　把手、土釜、蔵骨器



A　把手

土釜



B　土釜

蔵骨器出土状況

C　蔵骨器

B　口縁部拓影

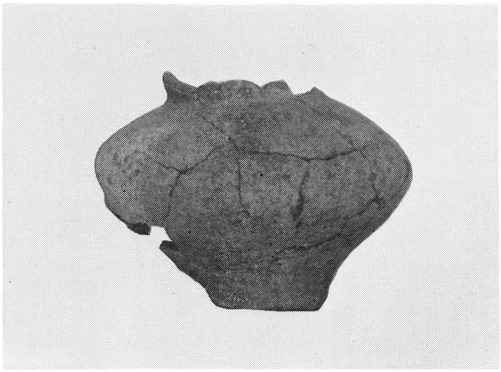
A　弥生土器甕

C　モミ跡をつけた土器　腹部

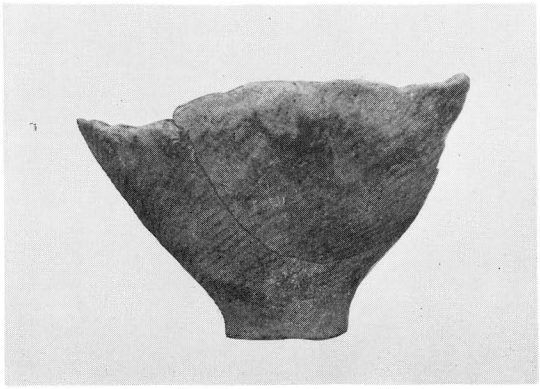
D　弥生土器壷（口欠損）　5様式

弥生土器を含む土壙

A



B

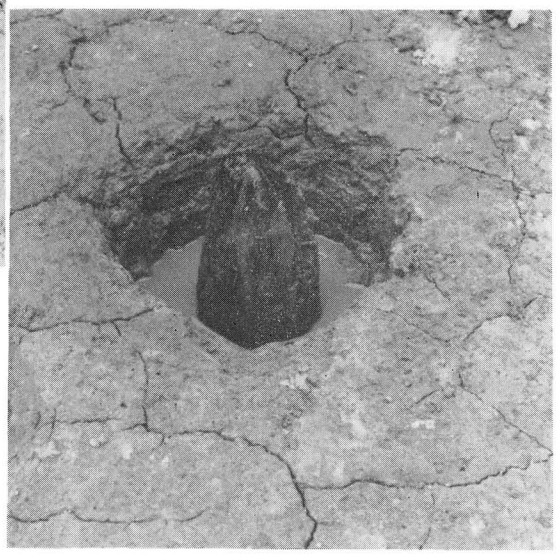


C

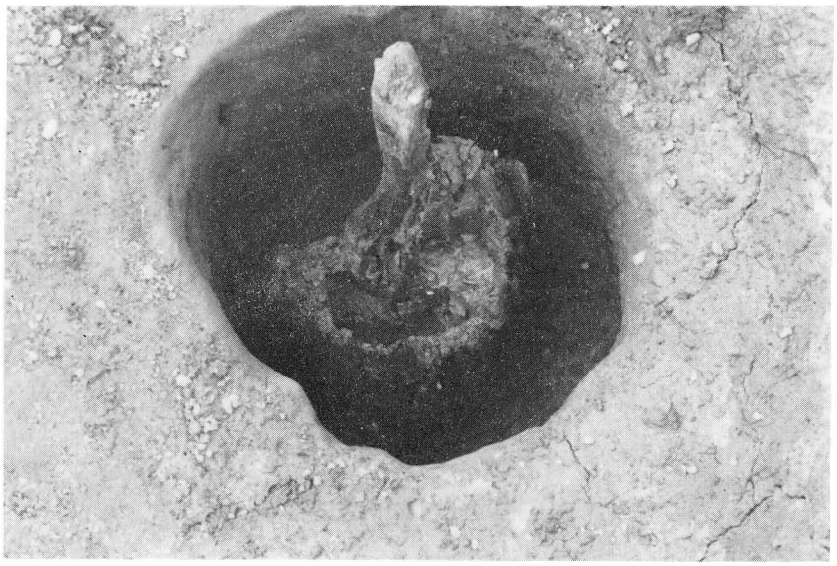
A・B・C　弥生土器

図版25　柱根と土壙内遺物

遺物出土状況



直径10㎝の柱根



直径20㎝の柱根

豊中市文化財調査報告書　第13集

上津島南遺跡発掘調査概報

発行日　1984年3月
発　行　府営上津島住宅遺跡調査団
編　集　〃　〃
印　刷　関西成光株式会社
大阪市福島区大開2丁目5番4号